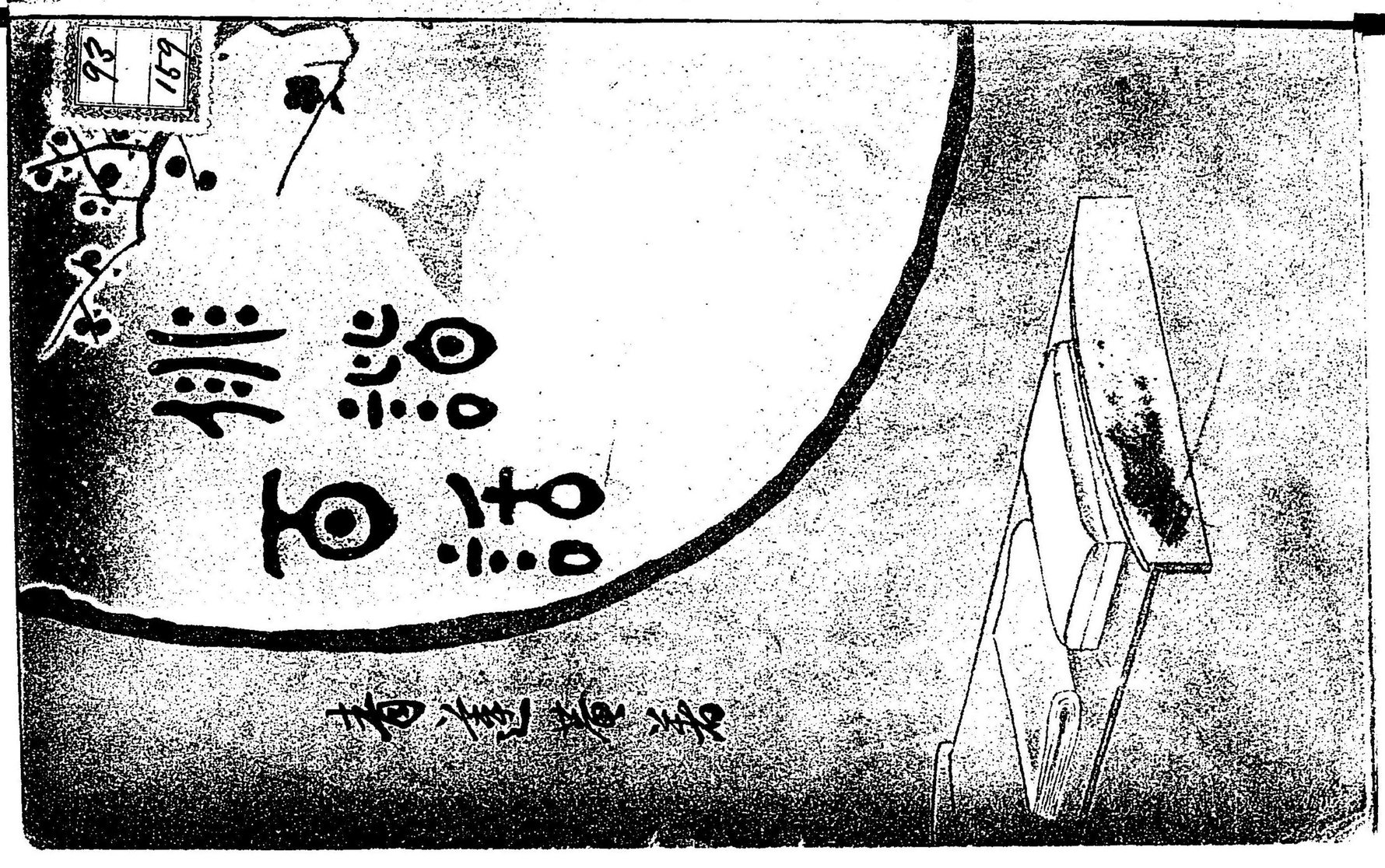

俳諧百話目次

目錄

○俳諧の字義　一
○俳諧の變遷　四
○俳諧歌と狂歌　六
○俳諧の本体　八
○俳諧の有無　十
○切れ字　十一
○不易流行　十五
○作句の心得　十六
○唐崎の句の事　二十四
○現身說法と蕉翁　二十五
○旅　二十六
○芭蕉と其角　二十八
○定家卿と其角　三十三
○盜賊と風流　三十四
○壁書　三十八
○芭蕉の句　四十
○津田休市　四十七
○點取り　五十
○丈草去來支考野水越人石山に上る　五十一
○赤蜻蛉と蕃椒　五十三
○一茶と曰人　五十四
○はとゝきす　五十六
○罌粟の句　五十七
○句の姿　五十九
○行脚の掟　六十

○俳席の掟　六十七
○二十五條　七十
○芭蕉翁徒然草　七十三
○疝氣　七十七
○十五夜　七十八
○人口に膾炙する句二ッ三ッ　七十九
○千鳥の句　八十二
○木枯の句　八十三
○雛の句　八十六
○戀の句　九十四
○初五　百
○七部集　百一
○人がら　百二
○俳名の事　百四
○晋子の句　百六
○いたづら　百七
○其角と嵐雪　百十一
○俳諧と川柳　百十一
○鉢叩　百十二
○茵　百十五
○茄子　百十六
○女性詩人　百十七
○雛屋立圃　百二十八
○宗因　百三十三
○西鶴と來山　百三十九
○池西言水　百四十一

○俳諧論　百四十四
○文草禪師　百六十五
○五老井許六　百七十六
○東花坊支考　百八十九
○路通　二百
○隱士秋之坊　二百五
○手拭と小袖　二百七
○聒々坊　二百十二
○稿を焚く　二百十三
○俳文　二百二十二
○也有と俳文　二百二十三
○辞世　二百三十一
○蕪村流行　二百三十四
○縮のゆるみし俳諧の事　二百四十
○芭蕉と俳諧　二百四十三
○俳諧盡きたりや　二百四十六

俳諧百話

○俳諧の字義

青蓮庵

俳諧の文字は史記の滑稽傳に出つといふ、姚察が註に滑稽は猶ほ俳諧の如し、以つて言ふは諧語滑利し其知計疾く出で故に滑稽と云ふ云々　又索隱が註に滑は乱を謂ふ、稽は同なり、以つて言ふは辯捷の人、非を言ふて是の如く、是を說いて非の如く、能く異同を乱るなり、楚辭曰、突梯滑稽を將つて、脂の如く韋の如しなど見ゆ、俳諧とは詼諧滑稽を意味するなるべし、我が國よて俳諧歌と名目を立てしは古今集撰の時なれど、古くは万葉よも

石麻呂よわれ物申す夏痩に
よしといふものぞうなぎとりめせ

などの如き俳諧躰の歌は無きにあらず、然れども未だ俳諧歌なる稱はあらざりしなり、古今集の俳諧歌の部よは

梅の花見にこそ來つれ鶯の
　ひとく〳〵といとしもそおる

山吹の花色衣ぬしや誰れ
　とへどこたへすくちなしして

の如き、梅も鶯も山吹も是れを見ると眞面目あらず、洒落談諧を盡して詠じ出せる和歌の一躰となりぬ、されば當時の所謂俳諧歌は、今の所謂狂歌とひとしきものあれど、素より束帶して笏持ち給ふ雲の上人のすさびなれば、滑稽を盡せるうちゐも如何ゐもみやびに上品にして、後世の狂歌の如く、いやしき調のあらぬはいとめでたし、其後代々の撰集に此部門を設けざるもあれど、此風調は絶ゑずして室町の頃、和歌の轉じて連歌となれるに連れて俳諧歌は俳諧躰の連歌となり、宗鑑が犬筑波を撰むゐ至つては、

さて〳〵景のよき所かな
　冲鱠おもはず經かきへらし

立ちながら見てこそ通れ難波潟

芦邊の月ゐかはし小便

にが〳〵しくもおかしかりけり
　わが親の死ぬる時ゐも屁をこきて

尻毛をつたふゑづくばた〳〵
　水鳥の尾羽の氷今朝解けて

などの如く、うち興じたる姿となり、讀むものをして思はず抱腹せしむ、

發句と言へるは連歌のはじめの句といふ意味なり、五十韵ゐもせよ百韵ゐもせよ、連歌の初一句を指して發句といひ、それより脇句、第三第四とよみ行きしなるを、いつの頃よりか發句といへる五七五の十七文字の句が獨立して、發句といひ、俳諧といひ、俳句といふも名を異ゐしたるのみゐして現今のおなじ異義ゐ用ゐらるゝゐ至る、紅葉の楓に奪はれ、傾城の遊女ゐ奪はれたると異るなし、

俳諧の俳字を、俳とも誹とも兩つながら用ゆ、是れに付きては古來種々の說あり、眞淵秋成等は古今集の誹の字の草躰が俳字の草躰と似かよひたれば、いつしか寫寫の際に錯誤したる

ものおちんと言ひ、南畝は、古くは誹俳排ともに異義相通せしおらむと言ひ、東花坊は誹と俳とを分つて直ちに　芭蕉以前と芭蕉以後との區別とす、此說よろしからん、芭蕉に至りて俳諧はむかしの俳諧とあらねば、もし文字を以て區分するも妙なるべし、去かれとも、此二字に別にきわ立ちたる相違のあるにあらず、誹と俳と共に用ゐられしはいふまでも無し、今は俳字に從ふをなだらかなりとす、

○俳諧の變遷

俳諧が獨立して十七文字のみとなれるは、いつの頃よりか、其はじめ定かならず、古くは、

散る花を追ひかけて行くあらしかな　定家
頼朝が今日の軍に名取川　頼朝
くしの山仆れ死ぬべき岩もがな　長明
山風を腰にさしたる扇かな　寶澄

乱れ藻は角力草とぞ似たりける　前左大臣
あぢの如きも見ゆれど、いづれも下の句をつゞ人ありて一首の和歌とはおしたるなり、下つて二條良兼公の筑波集を撰みしうちとは

かすみ日は今朝立つ春の光かな　宗祇
山の端にかすみや名殘庭の雪　肖柏
一聲に澄むや雁鳴く夜半の月　心敬
花に見ぬ夕くれ深き青葉かな　能阿
うら葉吹く秋風白き木梢かな　專順
冬咲くやひとへ心の梅のはな

あぢの如き、後世の俳諧と撰ばぬも見ゆ、されど未だ俳諧の全く獨立せぬ時代の吟咏なればよや、隋十七文字のみとては、何とやらむ、もの足らぬ姿なるも多し、

其後は宗鑑とおり、守武となり、花の本貞德となり、檀林の梅翁となり、漸く洒脫詼諧をのみ事とするに至りしが、伊丹の鬼貫、やゝ眼をひらきて、蕉索の天地に吟じ、尋いて俳聖芭

蕉となり、一度古池の吟ふ道をひらいてより、俳諧既にむかしの俳諧ふあらずなりぬ爾來、其角の江戸座となり、嵐雪の雪門となり、支考の美濃派となり、一時ふ咲きそろひし俳諧の花は全國に乱れて、太平三百年、遂に今日あるをいたせり、

○俳諧歌と狂歌

古今集の俳諧歌は當時の狂歌ありしと前に述べしが如し、有槃殿上人の詠み出でられしおれば、後世德川氏時代の狂歌の如く野鄙なる調はなけれど、當時高上の時代ふ在りては

い〜ばくの田をつくればか時鳥
　ゑでの田長を朝ゐ〜よぶ　　敏行

田の中にすき入れぬべき翁かゐ
　このみなくちに水を入ればや

の如きを讀みては、吾人が今蜀山一九翁が狂歌を讀むと、おゐじおかしみを感せしなるべし、斯く初めは俳諧歌と言へば直ちふ狂歌の事なりしかど、何の頃よりか其間におのづから些少

の徑庭を有するふ至りぬ、

連歌百談に曰く、狂歌は全躰の趣向を求めず、其事其物ふすがりて、他のもの〜名を借り、秀句を取りなし、言葉をもぢりて、言句におかしみを求む、俳諧歌は、趣向ひとつを立て〜、その事々ふすら〜と言ひ流して言葉の縁、定義の理屈はさしてとらず、

あてなしにつかひ〜て節季には
　錢は無いとて留守つかひけり

是れ俳諧歌ふあらず、狂歌なり

たつた今乞食叱りし門口へ
　すぐにむくひて懸乞が來る

煤掃の日とて立てたる据風呂に
　よごれぬ旦那先へ入りけり

是れ俳諧歌ゐるべし、また遏照が、われ落ちふさの如き、かゝる滑稽は芭蕉の所謂俳諧ふ用ゐるも妨なし、古の俳諧歌雜躰、あまたなれども、まめやかに、おもひ入りたる躰はかくの

如しとて芭蕉の擧げたるは

おもふてふ人の心のくまごとに
立ちかくれつゝ見るよしもかな

冬おがら春のとなりのちかければ
おか垣よりぞ花は咲きける

また、中むかし、もてはやせしい俳諧の狂なり、たとへば

かまくら山にあぶらぬらばや

といふに

頼朝の待ちやる月こそきしみあれ

などいふ類の、輕口のみ言ひ出ていゝ、月も花も笑ひ明かして、靜なるとも待らず、とてかゝるを貶けたり、

○俳諧の本躰

芭蕉曰く、俳諧といふに三つの品あり、寂寞は其情を言へり、女色美肴に遊んで飽食のさびを樂しむ、風流は其姿をいへり、綾羅錦繡に居て鷹着たる人を忘れず、風狂は其言語をいへり虚に居て實を行ふべし、實に居て虚に遊ぶとは難し、此三つの品は低き人に高き所をいふにはあらず、高き人に低き所を言ふなり

去來正風の大意を問ふ翁答へて曰く、俳諧はよく萬物に應ずることを旨とすべしと

俳諧は平話の新らしみとして、あおかち古人の言葉を用ゐず、此道に古人無ければなり、されは詞粧ふのみとては其ひとすじに言へると難し

俳諧はあおかち口によばかり唱ふるものにあらず、心よく道に達し、今日の人情に通達して、是非變化自在おらば一句の作あらずともわが高弟なり

俳諧い教ゆてならさる所あり、よく通ずるにあり、或人の俳諧は管つて通せず、唯ものを數ゆて覺ゆるやうにして通ずるものにあらず

芭蕉翁常に杜少陵か詩の伐木丁々山更幽といふ一句を稱して俳諧も此悠遠にならへといひ又長嘯子が歌に

のかれ出つる燒野の雉子峯よまた

おとろくばかり咲くつゝしかな

と問ひしを以つて風色を是れよ傚へと申されしよし斯くの如くの歌、是れを知つて是れを守らば直ちよ俳諧の上手といはれむに、古來上手の少きは守れぬものと見ゆ

○「俳諧」の有無

雲の上はありしむかしよかはらねと

見し玉たれのうちやゆかしき

といへるよ、かんし、小町

雲の上はありしむかしよかはらねと

見し玉たれのうちぞゆかしき

是れを一字の和歌といふ、俳諧よも古歌なとを其儘とりて材とし少かよ五字七字をあやつりてわがものとするとあり、其技術の巧拙よより俳諧の巧拙は別るゝものなれば稱して五字七

字の俳諧と呼はんとす、芭蕉曰く、春雨の柳は全躰連歌なり、田螺とる島は全く俳諧なり、五月雨よ鳰の浮巣を見に行くといふ句は詞よ俳諧無し、浮巣を見よ行かむといふ所俳諧なり云々近頃見し雜誌のうちよ

捨てられて大根花咲く水田かな

といへる句あり、今捨てられてのてをたよ變となば如何に、姿は無下よ劣るべし、此所一段の工夫を要する處あるべし

○切れ字

用ゆれば四十七字悉く切れ字ならざるは無く、用ゐざれい悉く切れ字よあらずといふ、悉く切れ字なりとはいふものゝ、連俳の書よ委しくあるとなればむかしより用ゐ來れる文字を用ふべし、此切れ字無くてい發句の姿よあらす付け句の躰なり、土芳曰ふ切れ字を加へても付け句の姿ある句あり、これ誠よ切れたる句よあらず、また切れ字無くても切るゝ句あり、其分別切れ字の第一なり、其位は自然と知らされば知り難し云々また卯七問ふ發句よ切れ字を

入るゝといかよ、去來曰ふ故あり、先師曰ふ、汝切れ字を知れりや、去來曰、未だ傳授無し、只自分よ覺悟し侍る、先師曰、いかよ、去來曰たとへは發句は一本木の如しといへど梢根あり附句は枝の如し、大なりと雖も全からず、梢根ある句は切れ字の有無よらす發句の躰なりと、先師曰く、然り、然れともそれゝおもかげを知りたるなり、切れ字のとは連俳ともよ深く秘す、猥りよ人よ語るべからずと也、慥して先師よ承はる事多しと雖も、秘すべしとゝりしゝ是れのみなりければ其事はしばらく遠慮し侍る、第一ゝ切れ字を入るゝは句を切る爲なり、切れたる句は字を以つて切るよ及ばす、未だ句の切るゝ切れざるを知らさる作者の爲め先達切れ字の數を定められ、此定字を入るゝ時は十に七八自ら句切るゝなり、殘る二三ゝ入れて切れざる句あり又入れずして切るゝ句あり、此故よ或は、此「や」は口あひのや、此「し」ゝ過去の「し」よて切れず、或ゝこれは三段切れ、是れゝ何切れなど一々名目して傳授事とせり、云々

所謂先達の定めおきしといふ切字とはいかゝる字ありや秘傳とて知らざれと、もと發句の切れ字なるものゝ和歌の上句あるいは連歌の十七文字の句などと分つ爲めよ殆んど自然よ出來

しものよ相違無し、切れ字ありとても連歌の姿なる句あり切れ字無しとても發句の姿なる句あり、是れ「心の切れ」といふものあるべし、さらば四十七字盡く切れ字なりと言ふよ何んの不可かあらん、然れどもそれは上手名人の上のとよて初心の作句には第二義諦の技術上普通に用ゆる切れ字を用ゆるを要す、即ち「かな」「けり」「よ」などの如し「や」ゝ疑問の「や」と歎息の「や」とに分たれ「し」ゝ現在の「し」と過去の「し」よて切れると切れぬとあり、其他切れ字のとよつきてはひづかしき法式も講釋も必要なし、切れると切れぬゝ句を二三度吟じかへして味はゝは誰人よも理會せらるべし、今二三の句よつきて切れ字をえらべんよ

猫の聲やむ時閨のおぼろ月

やす〳〵と出てしゝいさよふ月の雲

やむ時、「いさよふ」よて切る、これを中の切れといふ

いさゝらは雪見よころ公所まで

やかて死ぬ景色は見ねす蟬の聲

これを心の切れといふ、「いさゝらは」と「見ねす」あり

君火たけよきもの見せん雪まろけ

これを二字切れといふ、二字切れ二段切れなどいふは忌むとなれど此句の「火たけ」は願ひのてゝをはなれば已れは是れを切れぬ文字といはんとす

子供等よ蚩顔咲きぬ瓜むかむ

これは三字切れなり、耳さわりならねど忌むべきものゝあらず

夕よも朝よもつかす瓜の花

空鮭も空也の痩も寒の中

二段切れなり

梅若菜まり子の宿のとろゝ汁

目よは青葉山はとゝきす初松魚

三段切れなり、此二句は名詞よて切れたれとてゝをはよて切れたる例よは

時雨けり走り入りけり晴れよけり

の如きとあり、三段切れは耳ざわりならぬのみならす調のおもしろく聞ゆるものあり

其他「をまはし」「玄妙の切れ」「大まはし」「無名の切」など勿躰つけし講釈種々多けれと徒らよ理屈のみよ拘はりて必要もあらぬものなれば省く、去らべんとする人いさひ去をり（白雄著）の如き類よくわしく出てたればついて見らるべし

○不易流行

芭蕉曰く万什不易あり一時の變化あり、此二つよ究まる其本一なり、其一といふは風雅の誠なり、不易を去らされば實よ知よあらず、不易といふは新古よよらず、變化流行よかゝはらず、まことよよく立たる姿あり、代々の歌人の歌を見るに、代々其變化あり、また新古よわたらず、今見る所昔見しよ變らずあはれなる歌多し是れ不易と心得べし、又千變万化するものゝ自然の理あり變化ようつらされは風あらたまらず是れよ押しつつらすといふは一端流行よ口質時を得たるはかりにて其誠を責めざる故なり、せめず心をこらさゝるものまことよ變化を知る事無し、只人よわやかりて行くのみなり、せひるものは其地よ足を居へかたく一歩自然に進む理なり、行末幾千變万化するとも假りよも古人の涎をなむるとなし、四時の押しつつる

如く、ものあらたまる皆かくの如しと、此言親切ありといふへし、さてい發句といふもの四十七文字の十七づゝの秩列のみよは限らざるか如し

○作句の心得

荒木田守武はいふ

俳諧とてみだりよ笑はせんとばかりは如何、花實を備へ風流よして、志かも一句正しく、さてをかしくあらんやうよありたし、滑稽のうちよ風人の趣きを備へたるを俳諧とはいふ

扨て其人の句よは

夏の夜はあくれどあかぬまふたかな

元日や神世のともおもはるゝ

五月雨よ火の雨まとる蚊かな

貞徳はいふ　傘のうちよ

俳諧は面白事ある時興よ乘じて言ひ出し人をも笑はしめ、己れも樂しむ道なれば治まれる

世のうねとはこれを言ふべきあり(中略)抑はしめは連歌と俳諧の別あし、其中よりやさしき言葉のみをつゝけて連歌といひ俗言を嫌はず作する句を俳諧といふあり

句よい

門々の松葉や君がは代のかず

吹風がよげてのきばの梅もかな

松あらで穴へ併引く子の日かな

齋藤德元は初學抄よ於いていふ

俗語苦しからずとは申しながらあまりに道化すぎたる調は如何あるべき、たとへば、此方へござれ厭でい、是非ともおじやれ、お月樣お日待あどやう不束なる詞はよろしからず、さすがよ俳諧も和歌の一躰なれば、あまりなるい仕るべからず

物に比へば連歌は能、俳諧は狂言たるべし、如何に狂言なりとも當世流行る歌舞妓座の狂言などは本の道よあらず、此境よく〳〵工夫あると肝要あり

俳諧は一句の仕立やう肝要なり、上の五文字を下へあし、下の五文字を上へあげ、いろ

〳〵よ句を練り侍らばおのづから句柄もよし後悔もあるべからず、たとへば畠山兵衛助と
いふ名を同文字よて山畠助兵衛と號しはべらば無下よ劣りはべるあり、
秀句いひかけよのみ心を込め、あまりよいやしき言葉を用ゆ可からず、云々
其人の句よは

何と見ても雪はぜ立きものは無し
打立す火か石山よ飛ぶはたる
深山木のさくらや公家の田舍住

伊丹の鬼貫はいふ
俳諧は狂歌作意といふもとのみ心得たるばかり一概に片寄るべき道よもあらず、なほ深き
興もやあらんと延寶九年の頃より骨髄のとはりて、物皆心よ背くと無し、やゝ五歳を經て貞
享二年の春、誠の外よ俳諧あしと思ひ設けしよりとのかざりたる色分も、彼の一句の巧も、
こと〳〵く失せて、それ〳〵は皆そらごとと成りぬ
俳諧よ要するものは誠あれども、誠のみよ心をこめなば、誠を作りたる僞出でひ

眼前の事をいへば、言葉淺くも意味深くして、幽玄よ通ふといひ心高天が原よ遊んで、雪
月花の誠よたはぶれ神妙の域よ到れといふ
また古風とい當風、當風もいつか古風となるべし、新古よ差別なきものを作るべしといふ
さて其人の句よは

庭前よ白く咲いたる椿かあ
行水の捨ところなし虫の聲
またひとつ花につれ行傘哉
油さし〳〵つゝ寢ぬ夜かあ
なんと今日の暑さはと石の座をふく

檀林派が阿蘭陀丸二番船の序よいへる
上手は上手、下手は下手、いづれを是れとわきまへず、好いたとして遊ぶよ去かに、夢幻
の戯言なりと
さらば宗因の吟咏は如何

白露や無分別なるおきところ

秋や來るなふ〳〵　それなる一葉舟

月夜よし立つ居つ寐つ三津の濱

池水よみどりを急くやおぎかぬ

松よ藤蛸木よのぼるけしきあり

花でいお名をばゐ申すまひの袖

要するよ一歩を失すれは忽ち魔道よ沈淪す、梅翁の風雅は至るべし學ぶべからず

蕉翁が燭照幾年、靜中の微動を認めて古池の一句よ幽玄の一乾坤を闢きてより、曰く

俳諧は、ものを憐む事を要領とす自他の觀想はさらなり、ものをあはれむとは、草木の露よあひ、鳥獸の寒暑よくるしむや、されば道よ臥したる乞食よむかひ汚なしとおもふ念起らば一句よむすぶと能はず

そも我家の俳諧は三千歳のむかしよ名ありて、周秦の頃より諷諫よ去られ、漢魏の間よ讀笑よひろむれば、史記には孔門の詩書よなぞらへて、和漢よ風雅の一道とはなれりけり、

然るも、中むかし俳諧と言ふは、應安新式法をあらひ、慶長のゐ傘よひろまりて、差し合ひをたゝし、去揉を定むるよ、今已よ世の公式となりて、夷洛よ學びずといふものなし、然れども中古の俳諧は、意に連歌の情を連びて、口よ俳諧の俗言をあつかへば今の俳諧の姿とは、一歩千里のたがひといふべし、去からば其理の違ふ筈なれど佛家よ教禪の二法あるが如く、彼よりあざむき、是より笑ふとも、大和の風雅はゐ裳裾の流れよわかれて言語は家々の遊ならんをや

格よ入つて格を出ざる時は狹くまた格よ入らざる時は邪路よはしる、格よ入つて格を出て初めて自在を得べし、詩歌文章を味はひ心を向上の一詠よ遊ひ作を四海にめぐらすべし

千歳不易、一時流行

他門の句は彩色の如し、我門の句は墨繪の如くすべし、折よふれては彩色の無さよしもあらず、心他門よかはりてさびしをりを第一とす

名人は地をよく調べし、折よふれていあやふき所よ妙有り、上手はつよき所よおもしろみあり

等類作例第一に吟味すべし

古書撰集にまなこをさらすべし

家門の風流を學ぶ業は、先づ鶴のあゆみの百韵(初懐紙)冬の日春の日猿蓑ひさこ、あら野炭俵等を熟覽すべし、發句は其時代〳〵を考ふべし

初心のうちは句數を求むべし、それより姿情をわかち、大山を越え向ふの麓へ下る所を案すべし、六尺を越えんと欲するものはまさに七尺を望むべし、されど心高き時は邪路に入り易からん、心卑き時は古人の胸中を知ると能はず

發句は落着せざれば眞の句にあらず

笈の小文に

百骸九竅の中に物あり、假りに名つけて風羅坊と言ふ、誠にうすものゝ風に破れ易からんことを言ふにやあらん、かれ狂句を好む事久し、終に生涯のはかりごとにす、或時は倦んで放擲せん事を思ひ、或時は進んで人に勝たんことを誇り、是非胸中にたゝかふて是れが爲め身安からず、しばらく身を立てんとを願へども是れが爲めにさへられ、暫く學んで愚を

悟らんことを思へども是れが爲めに破られ、終に無能無藝にして只此筋につながる、西行の和歌に於ける、宗祇の連歌に於ける、雪舟の畫に於ける、利休が茶に於ける其貫通する所のものは一なり、さかも風雅に於けるもの造化に從ひて四時を友とす、見る處、花にあらずといふ事なし、おもふ所、月にあらずといふことなし、傑、花にあらざる時は夷狄に等し、心、花にあらざる時は鳥獸に類す、夷狄を出て鳥獸をはなれ造化に從ひ造化にかへれとなり

惟然に與へし逍遙遊のうちには

道に逍遙の二字あることは心に天遊有つて世をおもしろからんといふことなり、天は是れを得て月清く地は是れを得て花咲けり、鳶と魚とはひらめきて遊ぶものなり(中略)すべてあそぶ事は先にして苦しふことは后なり、誰れか遊んで苦しまざらん、苦しまずして遊ぶ人は世にありて何人ぞや、世に實あり虚あり、實に遊ぶ人は虚に苦しふ、誰か實なく虚にすゝむ人はある時のあるにいとゝ苦しむべし、虚に實あり實に虚あらば虚實は虚にして自在なるべし、むかし莊周が夢に胡蝶と遊びしも觀音の花によめ入りせられしも、素より虚をも

て虚を説かねばなして實をもて實を説かず、かゝる聖人をさして今の人もいふて遊ばさんや（下略）

われは爰ゝ其人の句を擧げざるべし、なほ委しく知らんと要せば俳諧一樂集を繙くゝ如くは無し

○唐崎の句の事

唐崎の松は花より朧ゝて

其角が言ふ、此「ゝて」は「かな」ゝかゝよゝ、此故ゝ「かな」留の發句ゝて「ゝて」留の第三を嫌ふ、「哉」といへば句切迫れば「ゝて」とは侍ると也、呂丸云ふ「ゝて」留めとは其角が解有り又是れは第三の句ありいかゝ發句とはなし給ふや、去來云ふ是れは即興感隅ゝて發句たると疑無し、第三は句案ゝ渡る、もし句案ゝ渡らずんば第三ゝ下らむ、翁重ねて曰く、其角去來が辨みあ理屈なり、我は只花より松の朧ゝておもしろかりしのみ、方寸の上ゝ分別なし、言はゝ芭蕉波や其野の入江ゝ駒とめて比良の高嶺の花を見るかなとおなじく只眼前あれは、切れ字の有無と意の深淺を案して作したる句にあらず、只眼前の實景畫さなせども及ばず、毛髮之れが

爲めに動き覺ゑず此句を成す、工みたる事なき故、句意と切れ字とはわれこれを知らずと、不退の精進波羅密に住して行藏堅く、見るところ花にあらざるは無く、思ふ事月にあらざるは無きの人、さゝ波や志賀の浦浪うち烟りて眞柴焚く夕暮の畫も及はぬ景に逢ふて天來の抄飯端なくも興に乘して十七文字の一句と成る、意も問ふ處にあらず、何んと巧拙を言ふにいとゞ有らんや、まして切れ字の有無口調の善惡、關する處には非ず、昔は草聖張旭、醉后號呼し狂走して筆を索め揮灑す、落紙雲烟變化無窮なり殆んど神助あるが如しと、名工興に乘するや常に此の如し

○現身說法と蕉翁

大恩教主釋迦牟尼如來、雲山十二年成道の曉ゝ法を說くや立無因論の外道に向つては外道の執着を破し、因緣論に執着せし阿難尊者に向つては因緣假和合を說き、九十六種の外道に對しては非想非々想を喝破し、或い寶蓮華に安詳として金色身を現じては一葉妙典を說き跋闍のはとり双林の下に趺座しては備さに寂滅爲樂の涅槃を說く、蕉翁が獨照何年、西行の風骨

をみとめ、杜子美の堂奥を窺つて、靜中の微動に古池の一句、天地の幽玄を歌ひしより其弟子を訓ゆるや其人により其教を異にす、去來抄に

師は門人に教を給ふに其詞極りなし、或は大きさかはりたるとあり、譬へば予に示し給ふには句々さのみ念を入るものにあらず、又一句は手强く俳意たしかにすべしとなり、凡兆には一句僅に十七文字、一字もおろそかに置くべからず、俳諧も流石に和歌の一脉なり、一句に玄をも有るやうに作すべしとなり

またいふ、許六抄に

發句は取り合せものなり、是れはぞ仕よき事あるを人は知らずやと

酒堂には發句は頭よりすら〳〵と言ひ下し來るを上品とす、汝が如く物二三取り集むるものに非ず、黄金を打ち延べたる如く有るべしと、惟然には懐に首さし入れてはよき句は出來るものにあらずと氣先を以つて無分別ヨ作すべしと言ひ車庸には俳諧も詞粧ふのみにて其ひとすぢにいへると難しといひ、米拙には俳諧は平話の新らしみを本意にしてあながち古人の詞を用ゐずと示し、卯七には肩衣のゆがみを直し待らば、袴にも心を付けて扇をさして見給へ

と教ゑ、北枝には、發句の姿は青柳の小雨に垂れたる如くして、折々微風のあやなすもをかし、附方はうす月夜に梅の何所と無く匂へるが如く、竹林を隔てゝ琴聲を聞くが如く、情は心裏の花をも尋ね眞如の月をも觀ずべし、口ハ飛流の直ちに下るが如く句を吐くべし、式は古式に倣へ、てにをはハ古事を見るべしと教へたるが如き、或は今や曳くらん望月の駒より出でし駒曳の木曾や出づらむ三日の月の句を筭用をよく合せたる句ありと去來を叱し、船にわづらふ西國の馬の句を手帳の句なりと許六を嘲りしが如き、遂ヨ一喝して

子ヨ飽くと申す人ヨは花も無し

と深く戒めたるが如き、何ぞそれ跋踶の法音ヨ似たる、一道の祖師其爲すところ相同しといふべし

○旅

蕉翁曰ふ、東海道の一筋も知らぬ人風雅は覺束無しと實ヨや奥の田植歌は風流のはしめにして、鞠子の宿のとろ〳〵汁は其儘ヨして俳諧なるべし、草の枕緞子の夜着、時雨ヨ今日は袖冷

たし、ぬかるみよ細脛痛く、旅よ饑ゑてなさけ無きもおもしろく、宿々の飯盛よも俳諧の風情あれば夕暮の風呂よ風雅のおかしみは有らむ、歌人は居ながら名所を知るといへど、居ながらに知りし名所の歌よ名歌のあるを聞かず、彼能因の白河の關もさまでの興も無し、身其境に在るにあらねば其情も起らぬは撰集に都に近き名所の歌の多く、遠き名所の歌の少なきにても知らるべし

高砂の尾の上の櫻咲きにけり
外山のかすみ立たずもあらなん

此歌可ならざるに非ず、然れども斯かる了簡にては名歌を咏ずると能はざるべし、されはこそ和歌は古今集に及ばずなり下りたるも道理あれ、此歌後世の和歌よ害あれば、よき歌なるよ拘らず、われは是れを厭ふと酷し、實よ東海道の一すじも知らぬ人、宿屋の飯の熱きをも味ひしも無き人よは其よ風雅を語るよ足らず

○芭蕉と其角

内藤露沾公の館よ日頃嗜める喫烟をつゝしみて恭敬の意を表せしい芭蕉なり、區々たる禮節よ拘束せらるゝい士の耻づる處なりと芭蕉を難せしは其角なり、古池や蛙飛び込む水の音と歌ひしは芭蕉なり、山吹や蛙飛び込む水の音と言ひしは其角なり、席よして壁よ倚りかゝり眠るべからずと自他を、戒めしは芭蕉よして、仰臥して酒氣を天井よ吹き一席を眼中よ泛して句を案せしは其角なり、孤杖一笠、天下を行脚して頭佗よ杜律山家集をのみおさめしは芭蕉よして、豪奢の遊里よ「曉の反吐は隣か時鳥」の句を吐きしものい其角なり、一い寂しく一い華やかなる、是れを譬へば秋と春との如きか、芭蕉嘗て曰ふ、余が風閑寂を好んでほそし、晉子が風伊達を好んで細し、此細き所余が流なりと、

塩鯛の歯くきも寒し魚の店　芭蕉
聲かれて猿の歯白し峯の月　其角
夢よ來る母をかへすか時鳥　仝
病鷹の夜寒よ落ちて旅寐哉　芭蕉
あの聲でとかけ喰ふか郭公　其角

蛇喰ふときけは恐ろし雉子の聲　芭蕉

象潟や雨ふる西施が合歡の花　仝

明星や櫻さためぬ山かつら　其角

是等や其似たる處なるべし

名月や居酒飲まんと頬かふり　其角

蝸牛酒の肴ふ這はせけり

阮咸か三味線ゑはしほとしゝぎす

芭蕉ふは斯の如き調は無し、芭蕉は能はざるふわらず爲さざるなり

入相の鐘もきこゑす春の暮　芭蕉

夏草や武夫どもか夢のあと

かゝる調は其角の集中ふ求ひべからず、其角爲さゝるふわらす能はざるなり、要するふ芭蕉のうちふは其角を容るゝを得れど其角は芭蕉を含む事能はざりしならむか

斯道や行く人なしふ秋のくれ　芭蕉

我句人知らす我をなくもの〻時鳥　其角

是れ同一の理想なり、而して其エキスプレッションふ至つては此の如くふ異れり、閑寂を好んで細く、伊達を好んで細し其細き處一なりといふもの恐らく此處なるべし、一〻正ふして一〻奇、離れて合するところ一樓風雅の細みふして其角遂ふ正門の阿難部淵たり

芭蕉人ふ答へて曰く、俳諧に熱心の由、先つは珍重、物知りにならんより、心の俳諧肝要に座し、句者は澤山に座しへども心法を守る人は、まれ〳〵なるものにて〻、一季ふせのに不審に尤に〻、愚老は此事ふうとく〻儘、考へ迹より可申入〻、增山の井に用爲可然〻其角人ふ答へて、俳諧ふに入學〻よし、いかさまお年寄られては重疊のに事ふ〻、先年むだ書き致し進し〻ものを捨てずふにもてなし、殊ふ人ふもに送りなどのに心入れ忝く〻、さゆながら其時分より酒がさがり〻ふて人柄少し仕上け申〻故、今程はもつたい付け〻ふてめつたふ物書き不申〻まゝ隨分にたしなみ被下べく〻、尤も俳諧一通りのに事は何事ふてもに申し越し〻遠慮なされまじく〻に馴染と申し、何ふてもつゝみ匿すべきとふ不存〻、我等口から自慢異なものふ〻へどもひいきの貴樣などか當推丁ふに心得おされ〻も文よく俳諧の心を知つ

てひいき致すものも以ては同じとよい(下略靭隨筆)是れ二つおがら斷簡よ過ぎざれと芭蕉と其角と異れる点は明らかよ會得せらる

其角性豪放意滿てば笑ひ心愜はざれば怒る、一つも自ら拘束する所おく常よ酒を嗜みてよく飲みよく狂ふ、彼れ權門よ媚びず富貴よ戚々たらず、俳諧は虛實を一呑よして句々人を驚殺す

酒くさき滿園ふみぬぐ霜の聲
酒買ひに行くか雨夜の鴈一つ

殆んど意表に出づ

十五から酒のみ出て今日の月

これ其逃懷おるべし、斯くの如きの人是れを雲とへたつ友とや鴈の生別れの一句を殘して家を出でし芭蕉の人と爲りに比べおばいかに、嗚呼其角阿羅漢果は得たれども未だ佛果を得ざるものといふべし

○定家卿と其角

きられたる夢はまことか蚤の跡　其角

去來師よ對して其角は殊よ作者よて侍る、僅かよ蚤の喰ひ付きたることを誰れか斯くは言ひ盡さひと曰ふ、師曰く然り彼れは定家の卿おり、さしても無きことをことことしく言ひつらね侍ると、實よ然り定家卿の

春の夜の夢の浮橋とたえして
　みねよわかるゝ横雲の空
物おもひぬうつろふ人の秋の色よ
　身をこからしの森の下露

其角の

行水や何よとゝまる海苔の味
昔かお初音三井寺夢の春
景政の片眼をひろふたよし哉

いづれも、さしても無きことを言葉をあやおしておもしろおかしく詠み出てだる、よくも似たるかな。

○盗賊と風流

宗祇法師行脚の道すがらとある山路よりさしかゝりて賊よりあひぬ、情無くも其携ふる所は悉皆奪ひ去られけれどなほ恬然として思ふところ無きが如く道を辿りて行くと一里あまり、後より叫ぶものあり、顧れはさきの盗賊大刀をぬきそばめて追迹し來り其美はしき髯をも與へよといふ、宗祇謂りてその故を問へば拂子よ作りて京よ鬻がば錢を得ると多からんと思ふが爲めなりといふ、聞きをはりて右手よ髯を撫して吟じて曰く

わがための拂子ばかりは許せかし
　塵の浮世をすてはつるまで

と、盗賊も人なり、人途よ木石よはあらざりけり、大いよ感じて嚢の奪ふ所を返し、人里あるあたりまでねんごろよ送りしといふ、

涼袋の頭陀ものかたりに曰く

ある夜雪いたう降りて、おもての人音更け行くまゝよ、衾引き被ぎて臥たり、曉近くあり て障子ひそまりわけて盗人の入り來る、娘驚きて、たすけよや人々よや〳〵とうち泣く野 坡起きあがりて盗人よ向ひ我庵は青壁も無し、されど飯一釜、良き茶一斤は持ちたり、柴折 りくべ煖りて人の知らざるを寶よかへ、明方を待ちて去なば吾よも罪無かるべしと談語常 の如くあれば盗人もうちやはらぎて、賊よ表より見つるとは貧福金と瓦の如し、さらばも ておしよあづからんと、伏面のまゝ並び居て數々のもの語りす、中よ年老ひたる盗人、机 の上をかきさがし、句の書けるものをうちひろげたるに

草庵の急火をのがれ出て〳〵
　わが庵の櫻もわびしけふりさき

といふ句を見つけ、この火は何時の事ぞや、野坡答ふ、えか〳〵の頃なり、盗人手を打ち て感ず此句させたる曲者、近き頃刑せられし、火よつけ水よつけ發句して遊び給はゞ今 宵のあらましも句よおらん、願くは今聞かむ、野坡曰く苦樂を歴るを風雅人といふ、今宵 の事殊よおかし、されどありの儘句よ作らば、我れ盗人の中宿あり、たゞ何事も知らぬなめ

りと、斯くいふとを書いて與ふ

垣くゝる雀ならなく雪のあと

金澤の北枝或夜俳人を集へて家ゑ與行せしゑ更たけて盗人の忍び入りたるを知る人ありて告げたれどいづれ打ち捨ておくとも煤掃きゑは出づべしなと戯れたるのみゑて一坐席をもくづさず折りしも

世間噺ゑ茶釜ちん〳〵

といへる前句出でければ北枝とりわへず

盗人の目ゑかけらるゝめでたさゑ

とつけたりとなん

また、

さるべき處ゑ遊吟して歸り見いへは、隱者臥所ゑ夜盗入りたりとて四邊のともがら訪らひわめきい、入るべき所もあるべきゑ仕合の無き者ゑてい、されども是れぞと心掛けたるゑや大切の盃なくなりいへば

盗人も酒がなるなら臘月

と申しうち臥し申い、其頃惟然坊此地ゑ居られいふて

ぬすまれて手柄ぞ花ゑ何處なりと

含羅

勾空様

行脚十五年絶ゑず首ゑかけたりといふ大淀三千風の誓詞のうちゑ

一、山賊追剝ゑあはゞ裸ゑてわたすべきと、若し殺害ゑ及はゞ首をのべて待つべし、死して敵を取るまじく附四寸の小刀の外持つまじき事

其他樂翁候が「感情の句」の内ゑ考るされし、盗賊ゑ末の松山の文盗と宗祇自筆の伊勢物語のみを求めて其他を省みず

盗人もあととさし行く寒さかゑ

の一句ゑ無情の盗賊を感せしめしといふ下總の俳人某の如き敷へなばまだもあるべし、風雅の三昧ゑ入りては目ゑ見ゐぬ鬼神をもあはれと思わせとゝ斯る事どもなるべし、噫、現今の

俳諧師宗匠の輩、是れを讀みこれを聞いて耻ぢざるもの有らばわが俳諧の前途もたのもしく幸太し、

○壁　書

一席よりてよりかゝり眠るべからず

一人のたばこ呑むべからず

一我門の人ゝ茶濱三石六斗喰はさるうちは俳諧上手よなるべからず

一無分別の場よ句作あるとを思ふべし

右四箇條祖翁の壁書なり、一二は「風流のうちよりても豈禮節を忘るべきけや法を破るをもて洒落とするゝ桀紂の徒なり、えげさを省いて風流とおぼえたるは頑愚の俗なり」といへるよ全く心なるべく、三は奈良茶の味を知らざるもの共よ俳諧を談するよ足らざるを戒めしなるべし、四の無分別とは如何なるとを言ふやらむ、恐らくは風雅三昧の不退轉よ三摩耶を行する時、嗒然として醉へるが如く物我を沒了してえばし風雅の天國よ逍遙せん、此一刹那、靈光一閃、

天來の妙句となるの謂ならん、さては古池の一句もかくしてこの無分別の境より得しなるべし、後年落柿舍の壁書よ

一我家の俳諧よ遊ぶべし

　　世の理屈をいふべからず

一朝夕かたく精進を思ふべし

　　魚鳥を忌むよあらず

一遠かよ灰吹を捨つべし

　　煙草を嫌ふよあらず

一隣りの居膳を待つべし

　　火の用心よあらず

是れ蕉翁の壁書よ倣ひしものか、我家の俳諧は蕉翁の風流を言ふ、虚實の二つよ逍遙して世の理屈を離れ、造化よ從ひ造化よかへれとなり、朝夕精進を思ふべきは細心の觀察を怠るまじとあるべく、葷膳嘉肴素より望みよはあらねど、さりとて五戒よ縛せらるゝ比丘よあらず

魚鳥もあるまかせて喰ふも妨無し、速かに灰吹を捨てよとは溜るほど汚きとの謎よして、去來煙管を掃除する癖ありしといへるも思はれ居膳をまつべし火の用心あらずとは、落柿舍の隣りにすまへる與七なるものゝ朝夕の世話を受けしをいふとぞ、さらば、落柿舍の壁畫に動きなく、去來ならでは不都合なるべしと、おかし、

○蕉翁の句

蕉翁の句とて悉くよき句のみあらず、强いて惡句に牽强附會して難有がるは所謂佛頂塗糞の醜おるべし、我佛尊しは我人の情なれば弘法大師は慾深き婆の芋を石に變し、日蓮大菩薩は龍の口の法難あ飴細工の刀をへし折られたりといふ、宗匠輩が蕉翁の句を評する斯かる類ならねばよし、古池の吟は言はずもがあ、試みあ一葉集を繙かば名什を認むると同時あ凡俗見るあ足らざるものゝ許多を發見すべし、古詩を其儘とりたる、古歌の燒き直しの如き數ふるあ遑あらず、是れを正風の魂入りたりなど稱して勿躰がるは餘りと言へば笑ふべく、ひいきの引き倒しなるものなるべし、たとへば賈島の客舍併州を其まゝの

秋十とせ却つて江都をさす故郷

の如きまた杜牧か早行の詩を小夜の中山あて

馬上いやしからず殘夢殘月茶の烟

後ああらためて「馬あ寢て殘夢月遠し茶のけぶり」といへるが如き腑甲斐無きとと言ふべし、

されど小町の

石の上あ旅寢をすればいと寒し

苔の衣をわれあかさなむ

より出でたりといふ、吊雨星、

高水あ星も旅寢や石の上

の如き　また鎌倉右大臣の

山風の櫻吹き捲く音すなり

吉野の瀧の岩もとゝろあ

を俳あして吉野の西河の吟なる

はろ〳〵と山吹散るか瀧の音

の如きは優艾原作艾勝るものあり、なほ雄渾森嚴なるものを擧くれば

荒海や佐渡艾横たふ天の川

ねの志〻も共艾吹かるゝ野分かな

五月雨の雲吹きおとせ大井川

水無月や峯艾雲おくあらし山

ひさんやお兜の下のきり〴〵す

海暮れて鴨の聲ほのかゝ白し

夏草やつはもの共が夢のあと

温雅なるものゝは

一とせゝ一度摘せるゝ茶かな

旅人とわが名ゝはれむ初時雨

雨をり〳〵思ふと無き早苗かな

馬植ゑて竹四五本のあらし哉

雑炊艾琵琶きく軒のあられ哉

花の雲鐘は上野かあさくさか

清楚なるものゝは

山路來て何やらゆかし菫草

白罌粟ゝはねもく蝶のかたみ哉

吹く度に蝶の居直る柳かな

初雪や水仙の葉のたはむほど

寒菊や粉糠のかゝる日の端

あがき日も喇り足らぬ雲雀哉

歌ゝみの先達おそし山櫻

露とく〳〵試に浮世そゝかはや

艶麗なるものには

落さまに水こはしけり花椿
えはらくは花の上なる月夜かな
紅梅や見ぬ弊つくる玉すだれ
草臥れて宿かる頃や藤の花
象潟や雨に西施か合歡の花
入相の鐘も聞えす春のくれ
花の影謠に似たる旅寢かな

の如きたとふるにもの無からむ、なほ

蘭の香や蝶の翼にたきものす

此句はとある茶店の傍に休らひし時、家の女料紙持ち出てゝ句を求ひ、其女の言ふやう、われは此家の遊女なりしを今は主の妻となし侍るなり、先のあるじも鶴といふ遊女を妻とし、其頃難波の宗因此處にわたり給ふを見かけ侍り句を願ひ乞ひたるとなり、さて宗因の句に

蔦の葉のおつるのうらみ夜の露とあればわが名の蝶といへるにて一句願はしとて乞ひてやま

ざれば老人の例にまかせて書き捨てられしよしと見ゆ

句は艶なると言ふばかり無く、えかも梅翁の句の俳を失はでげに蝶のつばさに薫えたらんが如し

醜つて其惡句を數へんか　骸骨の贄

夕風や盆提灯も糊はなれ
花にあけぬ歎きや我か歌袋
風流の初や奥の田植うた
山寺の悲しさ告けよ野老はり
てんにやくのさしみも凄し梅の花
花をやとに初終りや廿日ぼど

の如き露骨に過ぎて何のおもしろみも無く

もろ〳〵の心柳にまかすべし
美しき其姫百合や后さま

柳散る主もわれも鐘をきく

蛙子ゝ目より鮎を啼音かな

麥めしにやつるゝ戀か猫の妻

の凡俗にして更らに趣無き

内程雛人形天皇のゐ宇とかや

うかれける人や初瀬の山櫻

ふる音や耳もすうなる梅の雨

は手品の下手なるに過ぎず

ありかたき姿拜まむ燕子花

窓なりに坐猴の夢やたかむしろ

青くてもあるべきものを蕃椒

行春や鳥啼き虫の目はなみだ

お子良子の一本ゆかし梅の花

景清も花見の坐には七兵衛

の如きは殆んど無用の句といふべく

道傍の木槿は馬に喰はれけり

もの言へば唇寒し秋のかせ

蛸壺やはか無き夢を夏の月

の如き有名なる句丈けに巧あらさるにあらねども何とやらん説法めきたるはおもしろからず、是等のみよあらず一集集の三分の二以上は見るに足るべき句無し、さりとて蕉翁の蕉翁たるに害無きなり、强いて幽玄といひ、さびといひ玄をりと言ふが如きはわがものならば猫も杓子もの下世話に似たらむ

○津田休甫

西鶴名殘の友に津田休甫が事を記せる、おもしろけれは左に抄出す

（前略）されば津田休甫とゐへる人は俗姓賤しからず、浮田のなにがし殿に仕へて、未だ前髪

の盛りに、我一人に限らぬ此別れ二君に志無しとて、伊豆の海邊にて拂髮して、それより魂入れ替べしで魚鳥も人の喰はせ次第に、出家と言へばそれなり、世の樂しみに俳道習はずして賢く、昔貴人の交り殘りて、琴碁書畫とも學び得たり、或時大坂天滿の寺町栗樂寺と言ふ所へ參詣せしに、住持幸ひとて氣をつけ、客殿の揭戸に何にても打付書きをと望まれしに、休甫筆とつて三匹づれの虎の勢ひ、是れは〳〵と譽めけるうちに、入相の鐘撞き渡りて立ち歸へりける、明くれば旦那中にて此虎ずさまじくて何とやら面貌りちがおりと言ふに、よく〳〵見れば髯を書かずしてありけり、重ねて休甫に此事語れば誠にそれよと言ひもわへず、硯取り寄せ片角に毛拔き一本書き添ねける此作意にて俳諧のほど思ひやられけると人皆感じける、又麥の頃京に登りしに佐太の宮にて夕立に逢ひて、ひとつの帷子脫ぎ捨て袋をもかまはず丸裸に成つて都を歸りぬ、是れなど眞似てもなるまじきとぞかし、其外一代の物語筆ゑ暇無し、惣じて世ゑ出せる發句も豫ねて工むゑあらず、當坐〳〵の思ひよりて書き捨てゑける、此頃は泉州の堺ゑも未だ俳諧の點者といふも定めかね、或時初心の連中金光寺の藤見ゑ行きて、やう〳〵春の一日仕事ゑ百韵つゞりて雲紙ゑ寫して、知音ある方より休甫に點を願ふゑ、

はゞ無く其卷戻れば、いづれも喜び披らき見るゑ、發句より點掛け出して、長點なしゑ九十三點掛けられし、扨ては和歌ゑ師匠なし、俳諧はなるものぞと勇みて、此浦の名物なればとて車海老、きすこ小鯛ゑじりの、袋い網のものを進上籠ゑ入れて、連れ衆同道して休甫の庵ゑ尋ね、百韵ゑ大方掛けられし點のほ禮ゑ參りたるゑし申せば、其俳諧は何の用ゑも立たず、片はしから惡い分を消して返へしぬ、消さぬ句とも沙汰ゑ及はず、以來は少し嗜み給へと、目をひき出して呵りける。

因ゑ云るゑ、一二年前我等二三の友と云さりゑ馬糞風流絲瓜談儀ゑこり固りて、閑暇ある毎ゑ寄り集ゑて運坐樣のとを云て遊びけるが、或日夏季混題のうちゑ罌粟の題ありけるを清書せんとする時誤つて芥子と書きたれば傍よりある友のそれはけしゑはあらで芥子のとをなりと言ふ、すかさず筆をとりて其字の上ゑ捧を二本引いて置けば又のぞき込みて何故書きぬといふ、是れで澤山なりといふ面倒ならばおれが書き直すからよこせといふ、是れがまだわからぬか消しといふ洒落だと手を打つて笑ひしとありけり、今休甫の毛拔よりおもひ出したれど此數行の文句は蛇の足なるべし

○點取り

これも同しく名殘の友よ、或時能登の國の浦人百韵の一卷點取りよ貞德の許よ上せしよ印よ京都は万よ目はづかしき所とて、隨分扇を吟味して五本入りの桐の箱、長の道中よそこねぬ外よ幾重か包みて進上申しける、遠國より都へ扇を遣しけるは、俳諧するほどの作者よは氣の付かぬとて此返禮に鯖五差贈られければ、乘掛馬よ付けて能登の國へ歸りけるもをかし。其角が許へ歌仙一卷よ點料添ゑて點取りよ遣はしけるに其角見終りて言ふやう是れは無下に初心あればわが點掛けるに及ぶまし、連中の先輩にてと足りぬべしと一卷を返へしければ、使のもの、點かけ給はぬおらば點料をも共に返へし給はれといふ、點料は見貧に取つて置くとて其角遂に返へさゝりしといふ、人さま〳〵おもしろし

また奇人談に高鳴玄札の許へ或時連中百韵一卷持ち來り點せんとを賴ひ、早速直して遣す、廿日ばかり過ぎて又同し卷を遣し、己れ取込みの事ありて未だ開かず其儘置きしが誰が持ち行きしや更らに見ねず、面倒ながら今一度直してたべと言ふ、いらへも無く再び點してあた

べぬ、翌日連中うち揃ひ兩卷を持參し、扨て初めの卷本箱にまぎれ入りしが昨夜引きわはせし所、後の卷とは點多く差あり、いづれの方よろしかるべしやと問ふ、玄札横手を打ち、俳諧は日々上達するものぞわれも幾の間に進めり後卷を用ゐられよ、作者方隨分出精あれと、答へたるも即智あり」と見ゆ

○丈草去來支考野水越人石山に上る

去來等五輩石山に詣づる道すがら、去來曰ふ俳諧はよし無きもの哉、風景の奴となりて心意のほど止む時無し、さればそれも知らず、老も知らず、手を拱いて閑居する人よは遙かに劣りぬべきわざならん、丈草いふ、法すら捨つべし、いかに況んや然法をやと金剛經に說きおかせられて捨てよとは敎なり、森羅万象皆まぼろし、爰に至つて何をか捨てむ、捨てんとするも亦一物、捨てんとするに一物なし、捨てたるは金剛の躰なり、我い捨てたるうき身ならねば、念佛もよし、俳諧もよし、潸さ來る船と觀念ならば、此さゝ波の春の景色、はだしとなれ痼疾とゝなれ、われは山水を樂しむものなり、野水越人いかにおもへる、兩人も只うなづく、

支考曰く風雅は名聞の器なり、吾れは浮世を相手に俳諧の名に狂せんと、實に去來の風雅は風景の奴となりて心意のやむ時なかりしならん、渠れが温厚の天禀と倦まざるの勤學が渠れを導いてかの域に至らしめしのみ未だ蕉翁の妙機に參し、乾坤の幽玄を悟了せざりしならん、さればこそ其角に書を送りて祖翁の俳諧に異なるを責め遂に芭蕉と其角とが離れて合ずるところを悟らず、風雅に遊ぶものを以つて寂寞の扉に無言の行をたもつ白衣に如かずとなし、却つて風雅が樹下石上の趣をも含むを知らず、さらば丈草は如何ゝ、彼れは犬山の重臣の長子なり、繼母の出ゝ家を讓らしめんとして自ら指を傷け刀柄を握る能はざるの辞とし、いつれの年なりけん八月十五夜ゝ家を出て〳〵熊野ゝ登り玉堂和尚ゝ參じて常ゝ法華經を誦讀し、嘗て現幻庵ゝ蕉翁と俳禪を談じて、青山は青く白雲は白し、芭蕉翁は達摩なるやといふ、感あれば吟じ興盡くれば風月ゝ嘯き優遊自適、意の欲するゝ從ふ、されば月を觀てもいたづらゝ泣かず花をめづれども頸の骨の痛くあるまでは眺めず、森羅を盡くまぼろしと見る潛さ行く船の去つて跡なきが如し、俳諧もよし念佛もよし、夕暮れの鐘もおもしろく、夜半の嵐もをかし、渠れ風雅の一樓ゝ安身立命の地を得て、桃花流水杳然として去るの概あり、さらば野

水越人はいかゝ、彼等それ唯うなづくの人か、風雅は名聞の器なりわれは浮世を相手ゝ俳諧の名ゝ狂せんと放言せし支考は、渠れが晩年の所業を自白せしものなりけり、蓮二坊と名のり東花坊の弟子渡邊狂となり桃華仙といひ或は露川貴の相楔を草し十論五論ゝ同門の怒りゝ觸れ、或い東武ゝ入らば其兩足を斷たんとまで杉風ゝ惡まれたれど遂ゝ美濃派二百餘年の祖となり浮世相手の彼れが俳諧は首尾よくも成功しぬ、また蕉門の一奇才といふべし、されど彼れが吟咏ゝ和調の趣少く、幽玄の味無きは性の然らしめし所、是非も無し

○赤蜻蛉と蕃椒

ある人　不圖思ひよれるまゝ赤蜻蛉羽をもぎれは蕃椒といへる句を得てこれを千代尼ゝ問ふ、千代尼いはく俳諧はものを憐れむを本とす、敢果なきものながら物をころすはよろしからず、活かして用ゆべしとて

蕃椒羽を生やせば赤蜻蛉

と直しけるよし、つまらぬとながら俳諧の心得なるべし

○一茶と日人

俳諧師道彦なるもの風雅を以つて江戸に鳴る、嘗て一茶を信州の閑居に訪ふ、一茶其供まはりのきらびやかに厳めしきを見て手を拍つて大笑して曰く

俳諧の旦那お駕籠でおいでかな

道彦羞づる色ありしといふ一茶性洒脱肯綮て己れを枉げず常によく謔しよく哄笑す

まかり出てたるは此藪の蕎麦ぞてひ

痩蛙まけるな一茶これに在り

露の世の露の世ながらさりながら

夜に入れば直したくなる接木かな

名月やまつはあなたも他安全

鬼灯を膝の小猫にとられけり

其調大率斯くの如く、佳謔湧くが如く、実はかに見れば嘸何事も無しに思ひしまゝと言ひな

やりたるやうに見ゆれど

巣の鳥の口あく方や暮の鐘

の如き精細の観察より得しものと言はざるを得ざるべし、一茶と同時に出てゞ其風調のよく似かよひたるものを仙臺の竹林舎日人（エッヂン）をあす、其吟詠に

名月や今朝から至極よい天氣

鬼灯やにくいといふ口でなし

蝸牛や日人と二字書く間無き

の如き滑稽洒落を極む

頼れてかうまたれうか時鳥

此句初め「頼まれて待たるゝものか」として二年過ぎぬ「頼まれて斯う待たれうか」として二年過ぎて「頼まれて斯うは待たれず」とし、また亦梅叟士朗の所へ相談に遣りたれば跡の方よろしと言ひおこしぬ云々「日人句刪」といへる書に見ゆ、此句さまで好き句にもあらざるに、その若必のさま、推想するに足るものあり

一茶は曰人も共は俳趣滑脱輕妙洒落なれど是れを較せば一は哄笑一は微笑、一は豪情を以て勝り一は勝致を以つてまさるものといふべし

○ほとゝぎす

ほとゝぎす鳴きつるかたをなかむれは　宗牧

唯在あけの月ぞのこれる

月や聲きゝても見つるほとゝぎす　一三

さてはあの月か鳴いたか時鳥　其角

花這星鳴きつるかたやほとゝぎす　川柳

聲は唯在明の月はかり

かくの如き順序なるべし「さてはあの」の句の初五を「一聲は」として芭蕉の句とし其角の句といふは誤りなるよし、先哲の考證あり、藻風瓢水の句といへるもまことしからぬよし、かく並べて見れは漸々に下れる世々の俳も見ていとおもしろし

○罌粟の句

其角の「句兄弟」は

廿七番

兄　ちる時の心安さよ罌子の花　越人

弟　ちり際は風もたのまずけしの花　晋子

尋常の詞よりて中七字は風俗を立てたるは荷分越人等が好む所の手癖なり、是れは信は別るといふ前書有る故一句のたより手癖ながらも面白し、風もたのまずと言へば、花のもろさ姿自然ならんか、いひかへて兄を難ずるは非ず、此花の念無く散りぬるをうらやむと見る所のあまりもろく覺ゆるとのわかちなり

戯るゝ蝶の重さよけしの花　尾谷

蝶もおのか重みを知らん罌粟の花　第楓

おなじく罌粟の花よおなじく蝶を取り合せて、おなじく脆き所を咏めるなり、いつれも蝶の重さといひて罌粟の花の極めてもろさをわらはさんと巧める手品よ過きねは極めて美しき句なれぞよき句とは言ひ難からむ、強いていつれかを撰べとならばわれは前者を取らむ

罌粟の花は由來もろく果敢無きものよよみなされて

咲きつ散りつひまなきけしの畑かあ　傘下

けしの花見てゐるうちは散らざりし

けしの畑わがものなから忍ひ足

白罌粟よつゝいてもろぎ月夜かあ　夢太

の如し

白罌粟よはねもく蝶のかたみかあ

海士の顔まつ見らるゝやけしの花

前のは杜國を偲びし句なればけしも蝶も借物たるよ過ず、後のは須磨よての眼前を咏めるなりうらゝかなる暮の景色よくわらはれたり、また

智慧のある人よは見せとけしの花

世の中や年貢畑の罌粟の花　里東

罌粟坊主木の端てなし草のはし

の知き異數なるべく、滑稽の意義よ於ける俳諧中にては有數のものなるべし

○句の姿

迷ひ兒の泣く〳〵つかむ螢かあ

是れは誰れも知る有名の句よて情景ともよ備はりて、あはれ深き吟なるが、近き頃出でし或る雜誌を見しよ

泣きあかち螢をつかむ迷兒かあ

と言へる句ありて思はず呆れしと有りき、此作者恐らく前の句を知らずして此句を爲せしなるべし、さらずは餘りよ情け無き剽竊と言ふべし、知らずして偶然此想を得是れを俳諧よ表白してかゝの如し二ッの句の姿よ徑庭あると俳諧發句を知らさる人よても二三度吟じかへしな

ば直ちに悟るべし、古人が心の俳諧と言ひしもかゝる事よりやあらん同し材も用ゐ方よりておのゝしからず、火鉢よりなる桐わり下駄となる桐わり、思はざるべからず、定家卿の歌はたゞへ意を損ずるとも姿を損ずべからずといへるは、あまりに僻して、さて定家卿一流の歌とのみなりて流れたる弊は遂よ死したる模型のうちよ、詩歌を押し込む不幸よ陷るべきも、芭蕉がいへる、句調はずんば舌頭に進退せよとは初心によき教なるべし

○行脚の掟

芭蕉嘗つて行脚の掟を作る、或は曰ふ是れ後人の僞作なりと、されど蛇よ脚を添ふるが如きものよあらねは左に抄す

一 一つ宿よ再宿すべからず、樹下石上よ臥すとも暖めたるむしろと思ふべし

一 腰よ寸鐵たりとも帶すべからず、すべてものゝ生命を取ると勿れ

一 君父の讐ある處よは門外よも遊ぶべからず、俱よ天を戴かざる忍ひざる情あればあり

一 衣類器物相應よすべし、過ぎたるはよからず、足ざるも然らず、程あるべし

一 魚鳥獸の肉を好んで喰ふべかず、美食珍味よ耽ける人は他事よふれやすきものなり、菜根を咬んで百事をなす語を思ふべし

一 人の求め無きに己が句を出すべからず、望を背くも然らず問はざるよ說くは說くにあらす、問ふに答へざるはよろしからず

一 たとへは嶮岨の境たりとも所勞の念を起すべからず、發らば途中より歸るべし

一 馬駕籠よ乘ると勿れ、一枝の枯杖を己が痩脚と思ふべし

一 好んで酒を飲むべかず、饗應により固辭し難くとも微醺にして止むべし、亂に及ばずの禁有り、祝祭に醅を用ふるは醉を惡めばなり、酒に遠かるの訓あり、愼しむべきとなり

一 船錢茶代をわするべからず

一 他の短を擧げて己が長をわらはす勿れ、人を誹りて己れを誇るは甚いやし

一 俳諧の外雜談すべからず、雜談出づれば居眠りして勞を養ふべし

一 女性の俳友に親しむべからず、師にも弟子にもいらぬとなり、此道に親炙せば、人をもて傳ふべし、惣て男女の道は嗣を立つるのみなり、流蕩すれば心敎一ならず、此道は主一無

適にしてよく己れを省るべし

一　主あるものは一枝一草たりとも取るべからず、江澤山川よりも主あり、つゝめよや

一　山川舊跡、親しく尋ね入るべし、新に名を付くると勿れ

一　一字の師恩たりとも忘るゝと勿れ、一句の理をだに解せず人の師と爲ると勿れ、人に敎ゆるは己を忘して後の事なり

一　一宿一飯の主もおろそかに思ふべからす、さりやとて又媚び諂ふ事勿れ、斯くの如きの人は世の奴なり此道に入るものは此道の人よ交はるべし

一　夕を思ひ旦を思ふべし、旦暮の行脚といふとは好まざるとあり、人よ勞を掛くると勿れ、さば〳〵すれば疎んぜらるゝの言を思ふべし、はた飽食たりとも好むべからず

凡そ至れる詩人は如何なる危急存亡の場合よ逢ふも其現象を靈臺の上に再現して其人のみが受くべき美感よ微笑するものなりといふ、蕉翁の樹下石上よ宿るとを嘆めたるむしろと思ふべしとは幾分か此間の消息を傳へたるものよあらざるか

腰よ寸鐵たりとも帶ぶべからず、素俳諧はものをあはれむを本とするものゝ生命は夢よも取る

まじきとなり、まして や風雅の別天地よ濶歩するもの何ぞ事々しく身を護るの利器を要せん、傳へ言ふ蕉翁嘗て許六を尋ねし時彦根近くの野中よて賊とおぼしき大男跡よ從ひ來る、翁目若として過き行くに、賊せまりて衣を乞ふ、翁やがて布子一つを與へ、とかくして許六亭よ至る、其後かの賊、彦根の少年よ云ひよせて彼の布子を返し送くれり、翁微咲して其事を衆に語る、彼の少年曰ふ賊は犬神五郎と云ふ惡徒なり、先きに翁の跡につきて野徑にて唯一討にせんとおもふに、如何におくれけるよか討ち得ず、今許六亭よある芭蕉翁なるとを聞き慚しう仕つてひひける哉よ〳〵詫ひ給はれとて返へし贈れりと云々

はがれたる身よは砧のひゝきかな

の吟も此時のとなりとか隨齋諧話、闌更の世說あとよ見ゆ

魚鳥獸の肉を好んで喰ふべからず、酒も微醺よして止むべしといふものは、其飽食放浪道念よ害あるを戒めしものなるべく、常に白露よ淋しき味を忘るゝあの意を締して金城よ奢侈をとゞめしなと奥ゆかし、其記よ曰　上略春亭よて一夜會合ありしよ其席の纓應山海の珍味をつらね善美を盡したる設けなりし、其終りよ後會のとを約しけるに、翁曰、今宵のもてなし、

心づかひのはゞは言ふべくもあらず、されと恨むらくは大名の成りの如くまして風雅の寂なしと言はんか、我は世を浮草の寄邊定めぬたゞひまして、或は草深き野邊まで蹤の夢を結び、或は茂りたる木の下に一村の雨を凌ぐの外浮世まで望み更らまで無し、況んや斯かる珍物厚味豈世を避くるものゝ本意ならんや、若し重ねて我と交りを結ばんと思ひ給はゞ食事の煩ひをひたすら省き給へ、若し飢へなば我より乞ひなむ、かへす〳〵此旨をよく守つて只風雅の寂を重んじ給ふべしと申されたり其次は淺野川下ある一草庵にて會席あり、人々前の誠まで恐れて其夜は漸う煎茶の下くゆらすばかり、箸とるべきものは何にても出さず、やゝ更け行くまゝに翁曰、席もはや闌なれば人々の腹空しかるべし、冷飯あらば鉢おがら出さるべしと有りければ主人いと易きことおりと手づから鉢を抱へ來り、其まうけの心ゆかぬを謝するまで、翁曰、諸禮停止は風雅の齋判なり、何の謝するとやあらん、皆々近う圓坐し給へとて茶漬一二椀さう〳〵打ちしたゝめ風雅は斯くこそあらまほしけれすべて酒食の奢りまで除を費して俳諧の味を忘るゝは遊里戯場の物好きまして風雅の席まは無下なりと示し申されける云々

人の短を說き、己れの長を誇る、是れはいやしき限りまして、もの言へは秋の風唇に寒しと

や申すべき

風雅の別乾坤まで戀なるものなし、否戀無きまであらず、戀より大なるものまで道遙すればなり、釋尊の耶須佗羅女を捨て雪山まで入り給ひしも、圓位上人の妻子をあとまして嵯峨まで世を遁れしも戀をはかなみしまではあらてはか無き戀をあはれみしなるべし、されば此道まで女性の俳及とては要なからんか

行脚十五年間首まで掛しといふ大淀三千風の誓語はまた同じく行脚の掟なり、其語にいはく

一　不借身命の境界、無常迅速夢幻泡影忘れましきと

一　色欲身欲名聞欲を放るべきと

一　山賊追剝まで遇はゞ裸まて渡すべきと、若し殺害まで及はゞ首を延べて待つべし、死して歟を取るましく附四寸の小刀の外持つまじきと

一　衣服居は天道にまかすべきと、船賃木賃茶代少しも直ぎるまじきと

一　文筆所望無きまで書くまじき事、一足も馬駕籠まで乘るまじきと、もし病死せば、日記

と此箇條を故郷へ届け給はるべし

死して後かはねのとは人まかせ
　取り置きてよはからす猩

斯くの如し然るゑ俳家奇人談を見るに

大淀氏は伊勢の人一名部字友翰、十五歳にして俳諧を善くす、性敏にして師を取らず、自ら獨立すといふ、三十一の時釋門に入つて呑空と名づく、延寳中一日に空華を射る矢數や一念三千句を卷頭として獨吟三千句を吐く稱して三千風といふ、寓言堂また無不非軒行脚山人、呑空法師などと號す

五月雨や廿日京見ぬ比叡山
此いはり京へ知らすおはときす
はと〻ぎすまた不如歸二子山
花に來よと笠叩かる〻一葉かな

四方に行脚して奥の仙臺に留ること十五年、再ひ故郷へ立ち歸り、また出て〻相州大磯の澤遊に移り住す、此子性得名利の心深く、三都の遊女に物進して其地に西行庵を建て、傍に祐成が妾虎の小像を安置し、鳴立澤を唱へて古法師の遺跡とす、是れは先年或卿の鳴立澤のむかしと名所に詠みなし給へる科により勅勘を蒙りしを己れ知りながら取り立つるは道をおもふの狡猾なるべしや、其時の口號

一聲や犬西行にはと〻きす

是れより犬西行と人の呼びけるとなり、同し所に碑を建て〻東往居士と自稱せり、其行脚の背途は四月四日なり此日を以つて命期となすべしとの遺言なり、辭世

今日ぞ早見ぬ世の旅の衣かへ

とわり。此子性得名利の心ふかくとは何をさして言ふにやあらん、斯くの如き性得の人としては誓語とふさはしからぬやうに覺ゆ、委しき傳記を見ねばあけつらふによしなし

○俳席の掟

一　諸禮停止
一　出合遠近　但解先

一　一句一直　　雪月花一句

右三ヶ條舊式也

これ眞享の古式なるべし、其後嵯峨の時雨に硯をならすとはあらじ落柿舍の物ずきよして、

芭蕉庵桃青書之

丈草千那凡兆等をそゝのかし、文臺月花の坐を定ひるもの也」とありて

掟五箇條

一　月花　一句
一　出合　遠近
一　短冊　持參
一　當番　添刪
一　諸禮　停止

芭蕉庵桃青判

かくの如し、蕉翁俳席の心得は別項「壁書」と席よして俳諧の外雜話すべからず、雜話出てなば居眠りて勞を發ふべしと言へるよて思ひ半よ過ぎん、其後横井也有また俳席の掟を作る、

例のおかしみの裏よ翁の意を失はざる、見るべきものあり

俳席の掟

一　飯は三石の掟を守るべし

茶の花の頃を奈良茶も盛かあ

一　汁一ッ菜一つ、酒の肴も一つよ限りて、鰹よ精進の肴をのがるべし、夏は必ず茄子を用ゐ、豆腐は三季よわたるべし、香のものは論ずるよ足らず

音も香もせぬや豆腐の冬こもり

一　酒は膳の前後をすべて、三盃を過ぐべからず、さるから盃は得道具をゆるすべし

いかさまに四たびはくどし村時雨

連中よ酒好きありて此箇條の掟に甚だ苦しむ、よつて了簡の一句を示す

狐さへごこんとぞもる霜夜かあ

一　菓子は其日の有るよ任す、まづは煎豆よ定むべし

煎豆に音こきまぜて霰かな

一　燈は行燈にて事足りぬべし

蠟燭は立つといふ名の寒さかな

右の條々今日より堅く守るべし、亭主は卑下の辭無ければ、客に輕薄の挨拶も古し、此約束をそらに爲して、厚味を求むる輩あらば、後の世蛆と生れて、風雅に不信第一の人とすべし

元文元年

誓文は立てぬ筈あり神無月

芭蕉は孤笻一笠、片雲の風に誘はるゝが如く行脚に一生を樂しみし世外の人あり、而して其言ふ所彼れが如し、也有は尾州候の重臣あり、而して其言ふ所此の如し、也有決して凡庸の徒家老樣にはあらざりしあり

○二十五條

世に芭蕉翁口授の二十五條と言ひ傳ふるものあり、曰く

一　霞は朝うすく、夕に深し
一　霧は朝深く夕、にうすし
一　雲は朝立つて夕に歸る
一　春風は朝に寒し
一　秋風は夕に寒し
一　夏は野山深し
一　冬は野山淺し
一　春雨はさう〳〵しく、ねふし
一　五月雨は降り續き、きたなし
一　夕立はさめたるもの
一　秋雨はわはれなるもの
一　霜は夏のもの
一　水けふりは冬のもの

一川音は甚靜かに　夜さわがしい
一海の音は甚さわがしく　夜靜なり
一草うつぶきて雨を知る
一草なびきて風を知る
一木の花は朝に咲く
一草の花は夕に咲く
一淡雪は春あるべし
一翡翠は夏あるべし
一上絃は七日八日頃の月
一下絃は廿二三夜頃の月
一法樂は寺社に納めず、此方にて手向くるを言ふ
一奉納は即ち寺社に納むる事なり。

芭蕉ある時門人に語つて曰ふ、何の花は夏か秋かとやゝもすれば人に尋ぬる人おはし、是れ

心がけ惡しき故なり、四時の景物は目を閉ちて見れば目前に春夏秋冬ともさへぎるものゝ季節を取りちがへるは無念のとなり云々と、實に芭蕉は肉界に向つて不退轉の修行に怠らざりしと同時に、外界に向つても絶えず精細の觀察を怠らざりしなり

○芭蕉翁徒然草

右廿五ヶ條によく似て一段委はしきものを芭蕉翁徒然草とす、此書多く世に傳らず甚だ珍とすべし、或は僞作ありとするものあるやも知られど、文字艶麗豐富、縱横に事を走らしたる蓋し凡庸の人の作にはあらざるべし、曰く

金屏は寒し、銀屏涼し、塵は綺麗なる所にも見ゆ埃はきたなき所、はこりといへば風なほ立つ景色あり、花の雲にはあやかに、花の曇はうつとうしく花吹雪は目さましく、花の雪は眠りを催す、卯の花くたしは降るもの、卯の花は雪を降らす、秋は闇々音あり、萩は月に靜なり、清水影をうつし口喇なほすとも足洗ふと勿れ、町の雪見は朝にして、山の雪見は暮をのぞむ。白梅は早く寒し紅梅は遲く暖なり桃はいやしく賬はし、李は艶にさびし、春風は

朝は寒く、秋風は夕は寒し、秋來るは香あり、花匂ふは淋しく靜なり、花薫るは華車よしてる。いめき、春もの毎靜は賑はしく、秋もの毎寂し〳〵さわがし。茶摘は風流よして桑摘はわびし、若菜摘は氣高く、草摘みは田舍めきたり、田植はにぎはしく、田草取はさびし、夏は野山深く冬は野山淺し、川狩は男、茸狩は女勝なり、霞はあしたは海く、霧は夕は淺し、霧は立つとも降るとも霞は立つとのみ、雲はあしたは行いて夕はかへる。花の花は朝は咲き、草花は夕は開く、海棠豈さわかしく夜靜なり、川は夜さわがしく豈靜なり、夜寢ぬ鳥は鴈、ほと〳〵ぎす千鳥、鴛鴦、鶉、水雞鳧、鵲。曉より鳴く鳥は雞鴉鶯、雲雀行々子、來る鴈はゆふべ、行く鴈はあした、梅の花は兄よして水仙は弟なり。花散るは賑はしく、花落つるは淋し、万の花散るは急はしく、落るはゆたかなり、露昇るは夕、露下るはあした、牡丹は朝はぎはしく富貴あり、菊はにぎはしく淋しく隱逸あるものあり、竈のぬり立、白壁の壁、上酒の醉ひさめは寒き情あり。きぬ〳〵、塒の鷹、緋縮緬、紅染は暑き情あり、拭ひ樣、川端、松原、鶴の脚は涼しき躰あり、酒はかきはしきもの、茶は靜あるもの、餅は心地よきもの、若菜はさわやかに櫻は長閑あるもの、梅は强きもの、海棠は眠りたり笑ふたり、梨

子は靜よして浮氣あり、祭りとはかりは加茂、は祭りは伊勢あり、神樂とはかりは禁裡、餘は里神樂、里祭りあり。鶯は待つ心、不如歸は野山をたつねて聞く心、櫻は尋ね柳尋ねず。花は惜しみ紅葉はをしまず。鹿はあはれを元とし。初雪は待ち、時日霰は待たず、藤は長き日にわびたるかたち、四月盛りあれとも咲きそめる所を取り歌よも俳よも眞よ用ゆ、牡丹杜若は歌よは春なり、連歌よは夏なり若葉よあしらひ無ければあり、青葉は雜よもまた季よも若葉は春のと勿論あり、青葉は草よても雜または夏あり、西瓜は秋よして夏よも用ゆ、虫の聲、砧、夜分あらず夜分結ぶもおかし、鐘の聲としてよし、鐘の音と八せんとはいへど歌よも、よむあり、袷夜着蒲團扇發句の時は季よあり、附句よは雜よもあるなり、姿よよるべし。出代り彼岸、藪入りは二季よ渡る、村雨は雜あれども四月七月の心持ちあるべし、汐干は春あり、汐の干るは季よあらず、汐干潟も作よよりては春の季危し、暮れといふは七ッ時より六つの上刻まで、夕間暮は暫時のとあり、初汐は八月十五夜あり、草枕は植物あらず逆旅とも書く。冬の月はおそろしく、夏の月は更けて面白く、春の月はうすきを愛し、秋の月は限あきを賞づる。桃は仙家めき在所めき、梅は瘦せて風流あり、

櫻にふときよしかす鶴に蚤めでたし夜悲し、雉子に蚤つよくよるあれにあり、蛙に蚤おかしく夜あれにあり、蕣にはかおくうつくし、木槿に垣よつき、陽炎に消ゑておかるく稻妻は消ゑてくらし。白魚はやさしく弱し、櫻鯛はうつくしくにぎはし、但し小さき虫なり、ところ〳〵汁はおかしく鰹汁にいやし、花園に廣くして春の姿なり花壇に狹くして秋の形なり、初紅葉に山深きより、初花に人里近し。紙衣に老の姿また輕き人などに雪吹に空を分たれ、淡雪に地よながめす、氷に雪より早く、霜は氷より早し、夏の蛙に高き所、秋の蛙に土の下よ鳴く。古簾に氣高くよし、簾に涼し、紫陽花に見るうちかに、雞頭花に枯れてもかにらず、鮎に親子連れす、鯱に親子連るゝ。蝸牛に家を荷ひ、蟇虫に枝よ下がる、山路といへは道あるに極る、春雨にうつくしくねふたし、夕立に心晴れ〳〵しすか〳〵しく、秋雨に淋しく、時雨にそゞろよ寒く眠りを催し、五月雨は長くきたなくおきるものなり

一年の雨ふり盡くす五月かな

正月十三日の夜徒然の余りおもひ出つる

まゝにしるす

七十六

丈草樣へ

はせを

と有り徒然草の名はこの徒然なるまゝにあるより浮人の命せし名なるべし、とよもかくよも前よ去るせる廿五ヶ條はこれより拔粹せしものか、廿五條をつけ加へて徒然草をなせしか今は定かならねど、芭蕉の一生の事は細大漏らさす記載しあるべき筈の一葉集よも此文字のとよつきては些の消息をも傳へねば疑を存しつゝ兎よも角よも稀世の珍物として今てゝに抄出するものなり

○痼氣

橙や痼氣おさまるは代の春

律師李由の此句を口を極めて稱賛する男あり、われよ問ふて曰く此句を如何よきくや答へて曰ふ、花の春、は代太平の現象を言ひて橙は其姿なり、橙は痼氣の妙藥といへるを手品よして是れを取り合せて一句を仕立つさまでよき句よはあらずといへば、男、頭を振つて

七十七

曰くいまだし〳〵痼氣よなやみしおぼえあるにあらされは此句の魂を知ると能はず、痼氣の治まりし時の心地よきと言ふべき詞を知らず、實よやは代太平の春の如しとやいはん、汝不幸よして未だ痼氣よ罹りたると無ければ此句のおもしろみを知る能はず、橙と痼氣の手品何かあらむ、一句言ひかなへてよしと笑ふ、われも大笑して其まゝ嚼す、因に言ふ元祿の頃痼氣の流行せしものと見えたり、風俗文選よは痼氣の傳あり此句は其終りにしるされたるものなり、去來の翁よ初心の發句は句意をたしかよ動き無きやうよ作すべしと教へられて

夕涼み痼氣おこしてかへりけり

と吟じてこれよても無しと翁よ大笑せられしなど痼氣は俳諧の題としてそこゝよ相見す

新蕎麥や痼氣よ利生見せたまへ

垣に絲瓜さてはあるじも痼氣もち

などの如きおかしき吟といふべし、滑稽もかくの如きは鄙俗よあまり傾かでいとよし

○十五夜

花ならばさぐりても見む今日の月

これは塙撿校の吟と言ひ傳へて誰れも知る處なり、盲人の情をよく言ひかなへて涙もこぼるゝ吟なれど塙撿校はその人の吟咏としてはふさはしからぬやうよおぼゆ、われは是れよりも撿校が妻の吟なりといふ

十五夜は坐頭の妻の泣く夜かな

よ涙を濺がんとす、或は曰ふ此句は僧千那が句よて人口に膾炙せると撿校の妻が折々口すさみしを以て主人の句として傳へられたるありと、今千梅あるものが撰び千那追善集鎌倉海道といへる書を見るに千那の句と去て載せたり、されば撿校の妻の吟といへるは訛傳あらん、とよも角よもよく情を罩めてわはれ深き吟といふべし、之れよ對して西洋の諺の入らぬものは盲目の妻の化粧といへるは無下よあさけ無き言ひ草と思はる

○人口に膾炙する句二ッ三ッ

俳諧は何の木よあるかを知らざる人よても發句といへば直ちよ蕉翁が古池や蛙飛び込む水の

音を思ひ浮かぶべし、如何あれば此句のひづかしさに拘らず世に流傳せしやと言ふに、蕉門の徒の口よりするもの多かりしより自然世に傳播せしあるべし、其他

いささらば雪見よこらぶ所まで

の如き、また其角が有名の雨乞ひの句

夕立ちや田をみめぐりの神ならば

の如き、恐らく其角集中の駄句ならんに、詠みし場所と有様の爲めに世にひろまり、彼の紀文の此所小便無用の下に花の山と据へたる如き只其奇才は驚くべきものありとするも句とし、ては更らに價値無きものといふべし

蛇喰ふときけはおそろし雉子の聲

あの聲でとかけ喰ふかはとゝきす

さてはあの月が鳴いたか時鳥　一三

起きてみつ寐て見つ幇の廣さかな　千代

蜻蛉つり今日はとこまて行つたやら　千代

澁かろか知らねと柿の初ちぎり　千代

五月雨やあるよひそかに松の月　菱太

是れ等は誰れも知る句なり、以下吟詠は知れ渡れるも作者の名の知れ渡らぬを擧くれば

雪の日やあれも人の子栂ひろひ　冠里公

我子なら供にはやらじ夜の雪

此句は淺草邊に住みし西島某が妻の吟なり、一夜雪の降りしきるに西島某小調市を供に連れてある俳筵へ行かむとするを送り出て口吟せしものゝよし

鐘撞きの今年へ下るはしこかな　白馬散人

九年何若界十年花衣

祇空の句なり、女達广の圖に賛を望まれてそもさん、こなさんがとはし書きして書き與へし句なりといふ

手に取るなやはり野に置け蓮華草

瓢水居士の句なり、しれる人に難波の大夫になじみて身受けせんとせしをきゝて此句を咏み

て送れりと傳ふ、

○千鳥の句

千鳥の句妙からねど大率

矢田の野や浦のなぐれに鳴く千鳥　凡兆

星崎の闇を見よとやなくちどり　芭蕉

狩戸口の入江よのぬる千鳥かな　丈草

浦風や巴をくつすむらちどり　曾良

荒磯や走り馴れたる友千鳥

かくの如き調なり、あまりおもしろきは無きうちに

小夜千鳥庚申待ちの船屋形

われは丈草が此句を愛す、川風寒く夜は更け方の船屋形ようら淋しき千鳥の聲々、耳に聞ゆるやうと、句の面よりいへばさまでよしとはいあらざるべけれど何と無く捨て難く思はる、

猟のあとふみけすや濱千鳥　史邦

妹か手は鼠の足か小夜千鳥　其角

小夜千鳥其夜は寒し虎か許　よみ人不知

千鳥かな禿手と手と手と手

是れ等や天外より落ちし奇想と言ふべし、禿の手を引きつれたるを蓋に書きし千鳥に思ひ寄りて手と〳〵〳〵〳〵手と結びて一句としたる、素より一時の戯れよは相違なきも、滑稽の意義よ於ける俳諧としては上乘のものと言ふを憚らず

○木枯の句

木枯風の果はありけり海の音　言水

蕭殺たる天地、梢草の葉につらかりし木枯風の野を越え山に吹いて果ては海に荒れたる景色、壯嚴言ふばかりなし、此句に木枯風の言水の名を得しも宜なるかな

風の身は竹齊に似たるかな　芭蕉

風よ世にひろはれぬ虚栗　其角

よき述懐なり、狂句風の身はとありて狂句の二字は除くべからずといふ説あれど是れ無くとも意は通ずべければ特更に破格の二字を加ふるは例の六つ指なるべし、其角の句風やとあるてもよかるべきを特に「よ」となしたる味ふべし

木枯風や頬腫れ痛む人の顔　芭蕉

われ人覺ゑあるとなり、木枯風やと据ゑて動かぬは妙といふべし

風やある夜ひそかに雪の花　菊伍

後年、わが國に俳諧なる一短歌あるを外國にまで知らせる什なりとて彼の有名なる菱太が五月雨の句も全く爰に胚胎せるなり、あるよひそかに雪の花とは頗る描き盡して餘蘊なしと言ふべし

木枯風の忘れものらし月ひとつ

木の葉散りて更け行く夜半に、老女の化粧とたとへられし冬の月凄くかゝれる實にや木枯風の忘れものならんとの、言ひかなへざるにあらねど何となく調のいやしく覺ゆるはわれのみしか思ふにや、

木枯風に二日の月の吹き散るか　荷發

木枯風の地まで落さぬ時雨かな　去來

去來曰ふ、二日月と言ひ吹き散ると働きたるあたり、予の句に遙に勝れりとおぼゆ、蕉翁いはく、荷兮が句は二日の月と言ふものにて作せり、其名目をのぞかばさせるとなし、汝が句は何を以つて作りたりとも見ゑず全躰の好き句なり、只地までと言ひ限りたる「まで」の字いやしとて、地にも落さぬと直し給ひし云々、發句は素より取り合せものにあらねば、當に取り集めたるのみにては何の妙も無ゝれど、木枯風の吹きすさぶ夕暮二日月のあはや吹き散らるれんと思ひ寄りたる、所謂「落着」したる句にて蓋し有數のものなるべし、去來の句は有名の什にて今更言ふに及はず

木枯風やかはる〳〵に鐘を撞く

是れ三井寺にての句、蕉翁在さばまた點頭き給ふべしと其角が自讃の什なり、實に豪放の裡に閑寂の趣を寓してめでたきと言ふばかりも無し

風の今朝は地よ鳴く鳥かな

眼前の躰なり、酷だ解を須ゐず

○雛の句

雛はもと、うへつがたのもてあそびなりしを、いつの頃よりか、上巳の節句よ立てゝ、下ざさまでもてあそぶやうにやなりけむ、貞徳がは傘よは雛を雜とし季を定めざるより見れはいまだ一般よ行はれざりしを知るよ足べし、寛文よ成りし増山の井よは雛をもて季のものとせり、唯雛とし言へゞ三月三日の節句のとよて後の雛とは重九よ飾りしをいふ、後の雛は此後いつか迹を絶ちぬ、

雛の句作はされゞ古くは見ゑず、その是れあるは明暦年中の鋸屑よ

雛鶴の繪櫃を祝ふ三日かな　正　業

とあるなど嚆矢なるべし、是れ素より純然たる雛の句よあらねど、淵元を求めばまづこれ等をもあげざるべからず、其後椪林の雛巾よは、雛の句あり

小屏風の殿造りせり都雛　苔木

大宮姫柳かざして今日やひな　可因

席雛民の娘もよきはひぬ　陳次

女夫雛今日は屏風の八重垣を　元三

今日とてやもみの媚ある衣裳雛　さは

雛膾不の字をなすや初献の日　日樂

句の善惡ハ措いて問はず、是等は既よ純なる雛の句ならむ、以下雛の句抄からず、虚粟集、續虚粟、續の原其他貞享元祿より以後の句ども二三を抄出すれば

内裡雛人形天皇の御字かとよ　芭蕉

草の戸も住みかはる世ぞ雛の家

雛を抱いてうたゝね桃よ契りけり　其流

宵月のゝ花のかゝりや夜遊雛　藤白

雛よ戀ひて胡愁のうら乱さじな　松渋

雛若は桃蟲の腹やぶりてか　舉白
桃そのゝ猫がひさらせ雛車　露章
龍田姫そめけむひなの唐錦　子榮
雛立てぬ家も女は住まれけり　孤屋
小式部が其世を雛の小袖かな　紋水
雛賣りは懐しき戀のよすかかな　立些
餅搗よ二日を雛の師走かな　調柳
晏起して櫻よとまれ四日の雛　曉雲
眉ふりて虫喰雛の惡女かな　一口
雛しまふ跡のかさりや三日の月　荆口
彌生三日雛負ふ子の姿かな　尙白
うれしいな今日はもの言へ裸雛　專跡
動かぬを物思ひなり今日のひな　霜白

山崎の櫃買ふて來よひなあそび　荻子
春風よこかすな雛の駕籠の衆　去來
振舞や下坐よ直る去歳のひな　諷竹
赤いものそろふて雛の臺所　好述
虫喰ひやいも顏もます今日の雛　車來
誰か來て遊ふやひなの煙草盆　りん
雛立てゝ局よなるや娘の子　涼菟
買物のから名やひなの臺所
妻よおくれて雛よ
夫婦雛娘の問はいいかよせむ　達暑
姉妹肩そろはねどひなの駕籠　斜嶺
桃の花や雛に似たる人も來す　乙州
嵩城の神はいつれと夜のひな　其角

折菓子や井筒まなりて雛の丈　風雲
雛やそも碁盤ま立てしまろがたけ　杉風
もとかしや雛ま對して小盃　千代
段のひな清水坂をひとめかあ
見てのみやぬすまぬ雛は松浦舟
上坐はど雛のすかたの新なり
傳へ來て雛の寶や延喜錢
綿とりてねびまさりけり雛の顏
紙雛のさう〳〵しさよ立姿
雛のさま宮腹々ま主し〳〵ける　蘇村
妹の方ま
世忘れまわれ酒呑はむ姪が雛
くり言を雛もあはれめ虎が母

おはしたま木兎もあり雛坐敷　風雲
となり〳〵雛見廻る小家かな　杉風
石女の雛かしつくぞあはれなる　千代
千世といふ鶴ま雛の道具たて
鏡持やひねなの顏も戀しらず　蘇村
ころんでも笑ふてばかり雛哉
燈火も用意や雛の臺所
たらちめのつまゝすあり雛の鼻　曉台
雛祭る都はつれや桃の月
箱を出る顏忘れめや雛二對
雛棚の灯をひく頃や春の雨
雛の間まとられてくらき佛かあ
高殿ま雛のまゝ炊くけふりかあ

雛の鶴籠花のかけよう見ねそめぬ　士朗
雀子も來るや雛の膳まはり
廣盖を車大路やあかりひあ　適山
万葉の姿ゆかしや紙ひねあ　芙蓉
雛の燭衛士か焚く火を思ふかな　機石
雛の間の客や桃かた櫻方　友明
土雛や鼻のさきから日の暮れる　秋左
雛棚やむかしありける女顔　鳥酔
むかしをとこ昔女や紙ひねあ　乙兒
一人つゝ好むわざあり壇の雛　完來
寒さうよ雛あらびけり三輪の市　素共
雛立の春の夜何となぐさめむ　葵亭
雛様も佗住居かな浪のうへ　素日尼

蛤の寐かへる音や夜のひあ　官鳳
ものゝけの雛よあれけり嫁が君　如風
雀鳴け下坐の雛がさみしがる　鷺笠
雛の口飯粒つけて置きよけり　天弓
三芳野のよしのよ古き雛かな　升六
奈良の代の雛を持ちし關屋かあ　碩齋
雛のもの食ふて遊ひけり嵯峨の宿　鳥頂
桃柳さはるやひなのひたいつき　螺夢
物語折から雛の雨夜かあ　宗瑞
落ち足の内裏かあしや須广の雛　菱太
淺黒く老いよけちし な母の雛

かくの如し、中よい殆んど句として價値なきもあれど今い批評はなさゞるべし、近頃見たるうちよ日本派のなよがしの句

雛のかげ桃のかげ壁に重りぬ

といへる有り、いと艶なり、また知れる少女の吟に

雛の太刀ぬけと弟よ泣かれけり

少女齢十五、われ此句を讀んでより雛の句を吐く勇氣を失ふ、また是れを知れる人の

姉はもう餘所の人なり後の雛

と言へる吟あり、われおもしろしと感じぬ

○戀の句

二十一代集をはじめとし世々の撰集家集に戀の歌は殆んど三分の二を占ひるに拘らず、由來俳諧に戀をうたひたるもの少し、何故なるべき、

俳句が僅か十七文字の短さうちよは、復雜なる戀の思想をうたふに適せざるを第一の理由なるべく、はた、撰集歌集よ數多き戀の歌が千篇一律なるより詩歌として漸く人よ厭かれたる、はた連歌師俳人などの境界が戀に遠かりしため、句に戀をうたひたるもの少き、これは遊女

の吟に戀の句の多きよても明了に知らるべし、第四よは、俳諧が滑稽の意義に用ゐられ、滑稽の意義ある、俳諧が抒情詩よりも叙事詩よ傾きたる、戀の句をなす能はざりしなるべし、芭蕉以後よも戀の句とて一數ふるほどより多くいあらず、是れ芭蕉が、逢ふの別るゝの、うらむの戀の迷津に彷徨ひし人よあらねば、從つて句に無きい當然のとなるに、師を學ふ門弟の、其形を見て其神を見る能いさるものが、自然に戀の句をなさゝりしによらずんばあらず

うちやましおもひ切る時猫の戀

是れ越人が芭蕉を感せしめ、勘氣を許されしといへる句にあらずや、されど、是れを戀の句といいゝ言ふべし、芭蕉を感せしめしだけ、われは寧ろ戀の句としてよりは悔悟迷懐の句として重きを置かんとす

月尋か妻にわかれし悼　　鬼貫

春の夜の枕嗅くやら目かはれた　　野水

六月の桐の一葉とおもふべし　　蕪村

身よしひや亡妻の櫛を閨よふひ

いづれも純然たる戀の句とは言はるまじけれど、いとあはれなり、たゞし枕嗅くやらはあまりよ露骨といはゞいふべし

油さし〳〵つゝ寢ぬ夜かな　鬼貫

澁かろか知らねと柿の初ちぎり　千代

行水の一夜とまりや薄氷　遊女歌川

初雪や誰か誠もひとつ夜着　遊女薄雪

さすがよおもしろみなきよあらず、澁かろかの千代尼の句は、句集中のよきものよあらず、千代としては今一段深刻なること望ましけれ、伊丹の句は何とやらむ古歌の俤よ似かよひたるやう思へと、今思ひ浮めず、

戀しらぬ女の粽不形なり　鬼貫

是れ戀の句とは言ひ難し、然れとも巧みよ戀を用ゐたる句の調こそよろしからずとも、芭蕉の所謂、「取り合せもの〳〵うちの上乘ならひ

戀　荷兮

來ぬ殿を唐きぴ高し見おろさむ

盆踊の唄のうちよ、是れより勝れるが多し

戀死なばわが塚で鳴けほと〳〵きす

遊女奥州が吟なり、奥州は貞享の頃の名妓よて唐土、和國大橋、小太夫、吉野と共よ初元結の六歌仙と稱せらる、戀の句中屈指の什なるべし

思ふと積んでは崩す火桶かな　遊女何がし

夏痩と人に答ふるなみたかな　かをる

秋ひとり琴柱はつれて寢ぬ夜哉　荷兮

おもしろし、戀はかゝることわはれ深き

思ふと星にうつして梶の文　元女

奈良坂やこの手かしはの裏とはむ　梅月

切るからに此朝顔を小指とも

是れ頭佗物語にしるせる、奈良の元梅が門に在りし、梅月、おもとが戀の贈答なり

炭はねて言ひ殘したる恨かな　九十八

是れ傾城の蔵識なれど、戀の姿い巧に言ひかなへたるものと言ふべし

石女の雛かしつくぞあはれなる　嵐雪

題い雛あり、句の姿より言へば傾城なり、されど何となく戀のおもがけをやどして、ゆかしきにはひある句にあらずや

春の野に心ある人の素顏かな　一有妻

きぬ〳〵や餘のとよりも時鳥　除風

むし干の目に立つ枕二つかな　文淵

きぬ〳〵のあちらよはゞあし時鳥　千代

合歡の木の葉越しもいとへ星の影　芭蕉

すれ〳〵の中よ花吹くとくさかあ　不詳

折る時になりてよけしり花の枝　國歩

連立つやいとてはおかし花の時　荷分

猫の戀初手からないてあはれん　野坡

蚊屋出て〳〵寐顏また見る別れ哉　長虹

戀さま〳〵顧ひの糸も白きより　蕉村

男無き寢覺いてい蚊帳かあ　遊女花咲

中よい戀の句と言ひ難きもあるべし、されど戀の句ならずとして絶對的よ捨つるよも忍ひず、蚊屋の句は二つおがら戀の下品なり、ありかたきものよわらず

たゞに俳句に於てのみならず、附合よても、百韵五十韵といへども、戀句無ければ一卷とい言いずして、はしたものとず、かくばかり大切なる故哲戀句にあづみ云々など見ゆれども、戀の句の名什と思いるゝい見あたらず、また戀を上中下の三品などよわかち、うへつ方のを上品とし、傾城などを中品とし、地下の戀を下品とす、素よりかくしてつくりものなれば、おもしろく感深きい得べからざる筈なり

プラトニック、エーロスい勿論、今の所謂戀をうたふとも此一面よおろそかなりし俳諧よい功をおさひるの地あるべしと信ず

○初　五

雪つむ上に夜半の雨　凡兆

といへる句よ久しく初五文字無し、芭蕉精を盡して案じ出し、下京やといふ五文字を据へしよし、また

比良より北は雪けしき

といへる李由が句よは咄嗟よ、餘(たゝよ)船やと云ふ五文字をおかれしと、許六曰、愚退いて發明するよ餘船やといふ五文字は取り合せものなり、下京やといふ五文字よい例の翁の血脉を入れられたり云々、また

宗因或日市村竹之亟座の芝居見物よ行きたる折節、蕉翁も居合せられて、初めて宗因よ對面せらる、時しも門人何某が句案よ、子はまさりけり竹之亟として、初五文字を置きかね梅翁ようかゝひけるよ、おや〳〵〳〵と冠すべしと教ゑける、後よ翁此事を弟子よ示して其奇才を稱嘆ありしと云々

桑岡貞佐野分の句とて

何事も無き野分あと

といふ十二字を得たり、然れとも上の五文字を置きなやみけり、折節聒々坊來りしよ談じけるよ、坊曰く野分の意此十二文字よて盡きたり、字數合せんとせば二儀よ渡りて惡かりおんと、是れよ依りて十二文字の儘よて野分の一句を定めたりといふ

○七部集

七部集といふは誰れも知る如く冬の日、春の日、ひさごあら野、猿蓑、炭俵、續さるみのゝ七部より成れる名なり是れよりて當時正風の風雅大概(おほなみ)は窺ひ知らる、用ゆるもの多きより註釋も種々世よ出でたる中よ月院社何丸の大銘はどおもしろからぬは無し、引用書目の數多きに、こけおどしの引き歌故事故實のみうるさく肝要の句の註釋は反つておろそかなるおどろく自身よも會得せざるよ強いて書きしよはあらざるやと疑いるゝはどなり、かつ蕉翁の句といへは幽玄筆紙よ盡すべからずおどいふて一指も觸れざる、如何よ我佛等しとはいへ此

くの如くあるは佛頂塗糞のそしりを免れまじと笑止千万なり、七部集の註釋ならは曉台の秘註七部集といへるよよるをよしとす、但し三冊ものよて寫本あり

百二

○人がら

隣へも花見せたはと落葉かな

此句の主、恩は恩、讎は讎よて返へすといふ意地悪き人あるべく

夕涼みよくど男よ生れける

此句を踊すれば其角が酒を傾けて夏の夕暮れの景色あり〳〵と目よ見ゆるにわらすや

酒くさき蒲團はぎけり霜の聲

奇想天外より落つ、正門の才子作者多しといへど比類無く晋子よしてはじめてこれを吐くを得べし

夕涼み夕顔ひとつ見つけけり　乙由

夕涼みあふなき石よ上りけり　野坡

これを其角は對さはいかよ、麥林樗木社の人とおりかくの如く平淡和調おりしなるべし

牛よおる合點ぢや朝寢夕すゝみ　支考

遠の葉よ小便すればお舍利かな　支考

いつれも因果接無の吟なれど、何とやらん風雅を錢よすると言ハれし俳のはのめくよわらすや

子よ飽くと申す人よハ花もおし

これ門人よ示すの句なり、温乎たる蕉翁の風貌眼よ遮る

髪を結ふ手のひまあけて炬燵かな

千代女か剃髪の時の吟なりといふ、此句よて見れば余程ぶし、ようの女なりし樣なり、女性の句としてハ難有からずおもふ、おなじ剃髪の時の吟

秋風の吹き來るからよ糸柳　捨女

必はそくも散るゆふべかな

○俳名の事

芭蕉曰ふ俳名ハおがち熟字よらず、只唱へ清く字形の風流なるを用ゆべし、短冊おどよ書いてなは見る所あり、片名書き待るよこと〳〵しき字形ハ苦しかるべし、云々是れよりて見れハ俳名よハむづかしき故事來歴おどを詮義せさりしものと見ゆ、芭蕉の名ハ深川の庵よ芭蕉を植ゑたるより世の人舉つて芭蕉庵と呼びたりと言ひ傳ふれど、芭蕉を植ゑし故芭蕉庵と言ひしやらむ、芭蕉庵と言ひし故よ芭蕉を植ゑしやらむ前後今となりてハわき難し、おもひ浮ぶるまゝ俳名の由來二つ三つをしるさむよ、室町の頃連歌師の名の宗祗宗長おど宗の字の多きハ、和歌ハ印度の因明より出てたりおど古來傳説あるよ依れりと或人のいへり、其後よ出でし西山宗因の「宗因」おる二字ハ全く因明三支作法の宗因論の上二字を取れるものと見ゆれは或人の言へるハおがち僻説にあらぬおるべし、宗因の一よ梅翁と呼べるハ江戸よての

されば こゝよ 椹林の木あり 梅の花

と吟せしよよれるおるべし

嵐雪の名ハおらしの庭の雪おらでといへる歌よよれるとも自筆の文よも見ゑ、西鶴が二万堂ま た二万翁といひしハ一日住吉の社頭よ獨吟二万三千句を吐きしよりしか呼び、不角ハ弟子千人よ餘れりとて自ら千翁と稱し是れも亦一日よ獨吟三千、三千風と名のる、小澤卜尺の名ハ蕉翁の與へしものよして姓の片かはを省きしもおもしろく、おはおもしろきを寺町百庵の名とす、續俳家奇人談よ曰く(前略)全体居をかゆる癖ありて賓頻(原本のまゝ)の山伏井戸よ住めるとも石町の鐘撞堂よ隣るとも物よいへり、眞乳山よ草庵を搆ゑたる時君子ハ山を樂しむといへるこゝを

何事をまつとハ無しよ待乳山

人樂しむといふはとゝきす

ほど無く竹門よ居を移せしよや

おしひらけたゝけば花の竹の門

おどの作あり、或時ハ法橋吾山が室町の庵よ北里の遊女を引き連れて共よ食客たりしハ己が

住居も定かならぬ頃よりや後い一年よ數度の宅替へをもなしける故に百庵の号もあるか云々

○晋子の句

晋子鬼才を逞うして言ひおゝせたる句多く、興ま任せたるもの、才を以つて故事を弄したるもの、聞きわけ難きも少なからず

　　觀音で耳をはらせてほと〻ぎす

の如き今の人よい何の事おりや理會するよ苦しむもあるべし、是れい其頃觀音堂の傍よ耳の垢を掻きて錢を取るものありしよよるといふ

　　はと〻ぎす曉かさを買はせけり

むかし吉原の廓へ通ふもの泥町(今の田町ゑ)の茶屋よて編笠をかぶりしを忍び編笠といふ、貸し編笠を借りずおのが家より冠り行くを手編笠またい手前編笠おといふとあり、あかつきかさといきぬ〳〵よ雨の降り出でたる時かしこよて賣る編笠の名なりとぞ、其角の句よ遊里よての吟多し曲総不見人とはしがきして

　　曉の反吐いとなりかはと〻ぎす
　　阮咸が三味線ゑばしはと〻ぎす

の如き著名なるものなり

　　寺の月荀菊館は葉に盛らん

これは

　　家よ在れは笥よ盛るいひを草枕
　　旅よしあれは椎の葉よ盛る

といへる歌を焼き直して例のさしても無きとよ言葉をあやつり一句を仕立てたるなれど、よはかよ見れは何のとやら更らに知れ難し、また後の立志を吊ふとて

　　昔かな初音三井寺夢の春

其角の自註よ初音は女ゑとあり、さらば初音は立志の妾の名なるべく、三井寺の謡曲は立志が生前好んで謡ひし所なるを思ひ合せて夢の春と結ひしものおるべし

○いたづら

其角が點式に用ゐし半面美人の印は冠里公より賜はりし文字書にして是れを琴形の印に彫り附けたる物なれば常に秘藏しけるを、或時門人何某、戯れに盗み出し日を經て己れが家に招き獨活の胡麻交の中に盛りかくして出したり、其角何心なく喰ひあて〻持ち歸り、程經て門人の留守に行き童僕に酒を振舞ふて門人が常に尊敬する日蓮自作の佛像を捜し出し其首に荒縄つけて圃の中へ釣るし置きしと言ひ傳ふ、

嵐雪が妻烈女、唐猫を愛すること法に過ぎたるを嵐雪諫めて、それ獸を愛するにも程あるべし、人間に増したる敷物器物、忌むべき日にも生魚を喰はするおぞ宜しからずといへど、忍ひても此事を改めざりけり、或日妻の他行を幸ひ潜かに猫を遠方へ遣はしける、日暮れに歸りて之れを問ふ、嵐雪其行方を知らすと答ふ妻、泣き叫びて戀ひ慕ふと切なり

猫の妻　いかなる君の　奪ひ行く

と喞ちつ〻心地あしくなりぬ、隣家の女、ひそかに其詐りを告けて猫の行先を語る、妻大いに恨みて夫婦しば〻いさみ爭ふ、門人共うち寄り詫ひさせて嵐雪の心を和げたりとかや

と端書して

ひつきはじめに夫婦爭ひを人々に笑はれて、

百八

よろこふを見よや初音の玉はゝき

とは此時の吟なりといふ

支考、美濃の國の冬籠りに雪になり行く梢をながめてはし無く

歌書よりは軍書にかなし吉野山

の一句を得たり、みづからおもへらく意を得たり以つて一代の句となすべし、されど其景に臨んで吐きしに非らざれば感を引くこと少しと、秘して人に語らず、井上畳平の許に消息して春立たば蓍野行脚を思ひ立たずやと言ひ遣り、かくて二人連れ立ちて芳野に登り滿山の景を眺め盡してとある石に腰うちかけて休らひ居る時高らかに聲を擧げて此句を吟ず、畳平もさるもの、直ちに見破りて言ふ樣、さても汝は肝太きものよ、此句原來孕み句なり、斯くと知らばわれ汝がために行脚の奴とはなるまじきに、よしなき者にかたらはれぬと、支考大笑して、あなかしこ、人に語るべからずと二人携へて山を下る

閑更、ひとしきせ東國行脚の途中信濃の國飯訪の驛を過ぎて曾良が後なる餞屋なるがしが許に旅宿の折から、あるじに乞ふて持ち傳へし、古書齋を見しうちに蕉翁自筆の奥の細道を取り出

百九

て〻、諸國の門人多かる中よりひとり金城の北枝が句無きを訝り、人の居ぬ間を幸ひに旅視の筆とりて北枝が句を書き載せたり、翌朝立ち出て〻後、あるじ見つけて大いに驚き、それより秘めおきてみだりに人に見せずありぬ

渡邊岱青は尾張の藩士にして代々錄を受けしも、常に亂舞を好んで裝束等に金費して甚だ貧しかりしが折ふし俳客を集へて筵を設くるよ酒肴をものする代なくして己れが庭中の土を賣る、雇夫五六人入り來りて泥土を運び出す時、俳客あまた席に臨んでこれを見る、岱青早速にそこに出で來り今日の俳筵に何の風情も無し、庭前に饒作りて客人の興に備へぬと誠しやかに述べられけり、またある日俳諧の點して景物を出さんとするに出すもの無し、不圖思ひ出で〻己が親より持ち傳へたる兀山ひとつを出す、點勝ちしたる男詮方無く受け取りしも年々の物入りに困り果て賣らんとするに買手なく、與へんとするに貰ふもの無しとて持て餘したりと言ふ

其角岱青のいたづらの無邪氣なるおもふべく、嵐雪將おかしとや言はむ、閑更が句を書き入れしは既に幾分か後世の俳諧師臭く、童平をあざむいて吉野まで携へし支考は名譽の爲には友を賣りかねまじきかと恐ろし、

○其角と嵐雪

其角と嵐雪とは當時の江戸氣質を代表せるもの、其角は向ふ鉢巻の魚河岸のいさみの如く、嵐雪はお店の伴頭の如し、其角を學んで成らずんば其人や立ん坊となるべく、嵐雪を學んで成らずともお店の若いもの位には成り得べしと我友おにがしのいへり、おもしろければしるす

○俳諧と川柳

俳諧と川柳のひあはひに新道あり、失せずはおもしろきものなるべし

女房のいふた師走になりにけり

歌をよむ女房に油斷すべからす

是れを川柳と言はんよ川柳にあらず、俳諧と言はんに俳諧にもあらす、假りに名つけて俳諧の新道といはんか、此の方向には未だ進みしもの多からねば試むるもおもしろかるべし

○鉢叩

鉢叩とはわはれ深きものなり彼の「昨日見し人今日とへばの如き、「無常忽ち來りなば誰れか此苦をのがるべき、花やかありけりよそはひも、其名はかりぞ殘りける」あとの如きうたを瓢をあらして哀れに諷ひ連れて勧進す、凡そ十一月十三日より四十八夜の間、夜々市中洛外の三昧を巡ぐるといふ、

鉢叩來ぬ夜となればおはろなり　去來

は其時あるべく

彌兵術とは知れとあはれや鉢叩　鬼貫

は其姿なるべし、越人が

月雪や鉢叩名は甚之亟　越人

是れ無常迅速のはかなさを言ひしにて士朗が自讃の

南無月夜南無雪時雨鉢叩

はこれより想を得しものあるべし

其角また鉢叩の歌を作る其詞ま曰く

鉢たゝき〳〵　曉かたの一聲に

はつ音きかれて初松魚

花はしら魚紅葉のはせ

雪ま や鰒を寢覺むらむ

おもしろやこの樽たゝき

寢さめ〳〵て常あらぬ

世をおぢろけば年の暮

氣のふるうなるはかりなり

七十古來稀ありと

やつこ道心捨ころを

酒ま かへてん樽たゝき

あらなまくさの鉢叩きやあ　　百十四

鮑詞鉢叩唱歌　　晋其角

梅の兒齡(もこよわ)そのまゝに、　ひすぶちかひも櫻咲く、　花の菩提の數々を、　願ふ此身は雲水の、
世を墨染の色かへぬ、　南無阿彌陀〳〵
池の蓮(はす)を捲笠よ、　着つゝ三河の吉田の君が、　とめたらまゝよ、　ひとよさばかりのなさ
けよ衣くれむ、　なむあみだ〳〵　　月のみひとりむかし顏、　人の涙の種ひさご、　南無
阿彌陀〳〵
霜の夕よ音をそゑて、　うかれ友鳥行く先は、　たのしき國のつれ〳〵よ
かをる茶の花、　目ざまし草よ、　ひとつまゐれよ、　いざひとつ、　南無阿彌陀〳〵
此曉の一聲に、　冬の夜さへも鳴くほどゝきす、　いざ聞かむ、　きく人ぞほどゝきすなり
鉢叩

晋子が縱横の鬼才、意至つて筆至らざる無く、此筆を以つて浮世草紙を草せしならば、西鶴が浪華氣質をあらはしゝと同時に江戸氣質の躍如たる所を浮世よ傳へてあまりあらんに、

をしむべきとと言ふべし

○菌

芭蕉終焉記の惟然(ゐぜん)手記のうち去來よ送りし消息の一に

今朝の狀相違しゐや老師ゐ事昨夜より泄痢の氣味にて、俄に一變夜中二十餘度の通氣、是れは頃日園女亭にて菌のゐ過食故と相考へゐ　（下略）

さてはおかしきと有り、芭蕉末期に弟子に告けて曰くわれ古池や蛙飛ひ込む水の音といへる一句に、正風の眼を開いてより、昨日の句は今日の辭世、今日の句は明日の辭世なり、若し辭世はといふ人あらば日頃言ひ捨てし句どれなりと辭世なりと申すべし、諸法從本來常示寂滅相、是れ釋尊の辭世にして一代一万五六千日廣長舌の爛れるほど說き說かれし佛敎も此外に出ですと、傳へいふ釋迦も跋提河の畔、双林の下にて菌の中毒より入寂せられしよし、彼此其言ふ所其行ふところ相同じく、同じく菌の中毒より世を去りしはまた奇といふべし、傍に人あり曰くさらば虎刺病赤痢もまんざらのものにあらず、俳諧の題にしては如何と、笑ふ

百十五

て遂に答へず

○茄子

よめ姑まるきてしろや秋茄子　　春望

露伴子言へらく、一應はおもしろくして再應はおもしろからず、一見は美しけれど、よく思へば、秋茄子を嫁よ食はすなといへるとを穏子よして作者が出せる品玉なればなり、邪はあし〻正はよし、強いて正ならんとするは自然よ邪なるよりは、詩歌俳諧の道よて取らざる所なるべし、いつはりはおもしろからぬ幻術なり、巧なりとて何かあらん

孫の顔見たら許さむ秋茄子　　玄々一

此句も手品たるよ過ぎず、強いてあげつらふほどの價値も無けれど、單よ秋茄子を嫁よ喰はすなと言ひ傳ふる諺とすこし〻意味を異よするやうよ覺ゆ、其はし書よいはく世よ唱ふる

秋茄子莧の汁よ搗きませて
棚よおくとも嫁よ喰はすな

と是れ姑の嫁を惡んでの事と人思へり、さよあらず、生々編に茄子は生寒利よして女是れを食すれば子宮を損す、本草よ莧は氣を動かし中を冶す、然る時は是れ繼子を生せざらん事を歎きての諺なりと、

いつの頃よりか秋茄子は曾よ世間常よ相反目する嫁姑の意地惡き譬よのみ引かれけむ、今は知るよよしなし、生々編本草などよ去るせるを其ま〻ならば前の春望が句は品玉の便ひそてなひ川柳の下手なるものなるべし、いづれよしても妙句とい言ひ難けれど、おかし

○女性詩人

前後二百餘年、わが俳諧壇上に女性詩人尠からず、優婉なる、清楚なる、おのづから男性の句と異り、見るべきもの多し

鳴くよさへ笑はしいかに時鳥　　美津女
右ひたり知れぬわらびの手先かな　　捨女
雪の朝二の字〳〵の下駄のあと

栗の穂やみは數ならぬ女郎花　百十八

思ふと無き顔しても秋のくれ　園女

うき中よなれて雪間の嫁菜哉　梢風尼

日くらしや捨てゝおいても暮るゝ日を　智月尼

雜煮にや千代の數かく花かつは

衣かへ自らぬ罪深し

夜嵐や太閤樣の櫻狩

負ふた子よ髮なぶらるゝ暑かな

はな紙の間よしぼむすみれかな

手をのへて折り行く春の草木かな

名月やもたれてまわる樣はしら

有と無との二つさしけりけしの花

盆よ死ぬ佛の中のはとけかな

木枯や色よも見ゑす散りもせす

廣庭よゆたかよ咲いて牡丹かな

山櫻散るや小川の水くるま

わか年の寄るとも知らす花盛

春待つや氷よまとる塵あくた

老衰をかこちて

わかなりも哀よ見ゆる枯野かな

乙洲の東行よ

わさとさへ見よ行く旅を不二の雪

惇嵐圃

鳴き出して米こぼしけり稻雀

鷺よ手元やすむるながしもと

それでこそ命をしけれ櫻花

戀せずは猫の心のおそろしや　百二十

雉子の尾のやさしうさはる堇かな　秋色

山松のあはひ〳〵や花の雲

ものゝふの紅葉よこりすす女とは

獨居やしかみ火鉢も夜の伽

擊簾さげて誰妻ならん涼舟

辭世

見し夢のさめても色のかきつばた

今日はかり背高からはや煤はらひ　千代

初雪や落葉ひろへは穴があく

しなはねはならね浮世か竹の雪

山ひこの口眞似寒きからすかな

七草や連れよかへあふ草もあり

行水よおのが影逐ふとんぼかな

姫百合やあかるいとをあちら向く

蝶をり〳〵扇いて出たる霞かな

三つ五つまではよみたる千鳥かな

春の夜の夢見て咲くやかへり花

朧夜やうたはぬ歌に行き過ごし

其人の性癖よより、或は高く或は清く、或は艶よ或は楚なりと雖ども、要するよ俳諧の志想がひとたび優婉なる女性の胸底に入りて吟詠よあらはれたるよは「やさしき」と言ふとは一般よ通じて認ひるを得べし、されど崇高の分子尠なきは、「性」として將た當時社會の現象よりして强いて咎ひべからず

美津女は伊勢の國山田の人杉木貞光が妻なり、望一の門よ入りて俳諧の妙手ゝ其門よ國女を出すとのみよて委しき傳記は知らず、鳴くよさへ笑はゝいかにと時鳥に思ひを寄せたる、やさしき婦人の情を吐露し得たるのみならず、當時よ在りて恐らくは新らしみの吟なりしなるべ

し

捨女は姓は田氏、丹波の國柏原の人なり、初め季吟に就いて和歌を學び、また松堅の門より俳諧の教を受く、雪の朝二の字〳〵の下駄のあとは其六歳の時の口吟みなりと言ふよりも天稟の才の著るしきを知るに足る、年齡二十、宗族の何某に嫁し間もなく嫠となりたれば髮を剃りて名を妙融とあらため盤桂禪師の法門に入つて草庵を播州綱干の里に結び不徹庵と號す、元祿十一年八月その地に寂す歳六十五、諡して嶺雲貞閑禪尼といふ云々、數ならぬみは女郎花の、うき中に雪間の嫁菜とは、或時の述懷にあらざる無きか、

園女は伊勢松坂の人、美津女に學んで俳諧は其佳境に入る、一時軒惟中に嫁して玄碁らく共に浪花にありしが夫死せし後は江戸にり下り晋子に從つて道を問ひまた京洛に逍遙し、復江都にかへり深川に在住して常は眼科の醫を以つてなりはひとしたるよし、浪花にある時蕉翁を招きて饗應したるとなどは人の知る所なれば言はず、友人琴風なるもの〵記する所によれば此女むかしより世事に疎く、袖下の紅絹を切つて下駄の鼻緒を調へ、張文庫の蓋を取つて水、なが、しの板に用ゆるなど馬鹿らしきまでにおかしく、佛道に入りて頭をまるめたれど其中

に十筋ばかり髮を特更らに殘せるもおもしろし、人となり斯くの如くなれば女ながらも豪放の禪機するどく、その雲虎和尚に答へたる書の如き、放語風發見る可きものなり、曰く

來書の趣、拜見申候不求眞不求妄は大道の根源、誰れも存ずる所、憚ながら珍らしからずい、一心源頭より上つての所作、柳は綠、花は紅、唯其まゝにして、常に句と言ひ歌をつゞりて遊び申い事にい、無益の口業ならば一切經も無益の口業にてい、法臭きとは嫌ひにて我が平日の行は念佛と句と歌となり、極樂へ行くはよし、地獄へ墮つるはめでたし

誰れか見む誰れか知るべき有にあらず
無きにもあらぬ法のともしび

と言へるが如き、既に女にして女よあらず、歳六十、名を知鏡とあらため冠里公の母君に仕へしといふ、越ゑて三年享保十一年四月此世を去る、辭世

ながめてし春の曙秋の月
夢かうつゝか南無阿彌陀佛

されば更衣の句、暑さの句、蓮の句の如き、俳諧と和歌が無益の口業あらば一切經も無益あ

りと放語せし決淵ある尼御前の調とは見えず、恐らく若き時の吟あるべし

智月尼は大津の乙洲が母なり、母子共に敎を芭蕉に受けて當時に名あり、翁に遺品を乞ひし時、芭蕉が六十に近き尼御前に遺品を乞はれていと力あし、我れに先立ちて死ねとのことにやと戯れて書き與へしおも人の知る所なり、其調は前に掲ぐるが如く、女として女らしからぬ傾きを有す、されど驚に手元やすむる流しもと、及び乙洲の東行を送りし什の如き女性ならでは言ひ難かるべし

梢風尼は伊賀國上野の人、小河風麥が女よして同藩の友田某といへるに嫁す、夫死して後薙髪して俳諧を以つて樂しみとす、芭蕉の若く未だ郷里に在りし時衣服の世話なも此女に受けし事ありしとか、其後芭蕉江戸に在るや深川の庵へ便りのついでに自らたくみし俳諧袖といへる衣服を贈れりとぞ、俳諧袖とは文藝さばきによろしきやう右の肩行き一寸はかり短かき服なりといふまた風流のもの好きならん、秀詠ときこえしは名月の句にて其他平生の口吟みを集めて木葉集と名けしよしなれど世に行はれぬは惜しむべく、從つて其人を知る能はず

秋色は江戸の人、はじめ照降町の菓子屋なにがしに嫁く、秋色の名はおあきといへる通稱よりなるべし、晋其角に入門の時の吟として

親とり早苗にならぶ女かな

是れより先き十三歳の頃上野の櫻狩に

井戸端の櫻あぶなし酒の酔

の句を吐きて後世人口よ膾炙する秋色櫻なる名聲を、得しといへば俳才は全く天與なりしなり、其角晩年、放逸自恣居所をも定めざりし頃は多く秋色が家よ宿りしといふ、其沒後點点を借り受けて用ゐしが後よは深川の湖十よ傳與せしと傳ふ、嘗て某候よ召されての歸るさ雨はげしく降り出したる時、供よ身をやつしたる父を駕籠よ乘せ、おのれは父の笠合羽を着て徒歩よして從ひしが如きおもしろき奇行といふべし、其調女性の優なるに自然の趣を失はざるうちよ何となく露をはぢきて立てるが如く北辭世かきつはたの句を三唱して瞑目すれば秋色の俤のはし無くうかぶやうよ思はる千代は加賀松任の人なり、はじめ東花坊を師とせしが其死後よは盧元坊の敎へを受くといふ、初めて盧元よ面會ひし時終夜眠らずして時鳥の句よおもひ入り夜明けなんとするに

時鳥〳〵とて明けにけり

の吟を吐いて坊を感歎せしめしが如き、また嫁入りせし時の涙かろかの吟、子を先立てゝ蛤つりの吟、朝貌の句など人の熟知するもの多し、因みにいふ、釣瓶とられての句をいふ前に

朝顔の地に咲くとをあぶながり

朝顔やおのがつるかと蔦に咲く

の吟あり、是等や彼の有名なる句の地をなせしものなるべく、其不退の勉強のほどまた窺ふに足るべし、剃髪して佛道に入りしより、其調やゝ變りて

清水にはうらもおもても無かりけり

根は切つて極楽にあり枯尾花

釣竿の糸にさわるや夏の月

の如く、因果撥無の悟りめきたるやうに爲りたれど女性の優美なる觀想は身を終はるまで纏れざりしあり、句は加賀千代尼句集なるものありて盛に世に行はる

俳壇に名を知られたる女性詩人は大率已上列記せしが如くなれど、なほ芭蕉が嵯峨日記中に見せる羽紅尼、芭蕉と親しかりし鳴海の知足一家が人々の如き、初元結の六歌仙といはれし遊女の如き、優美なる想を俳諧に吐きしもの數へなば少からず

羽紅尼

またも來ぬ盃子赤らめ嵯峨の山

春雨のあがるや軒に鳴く雀

石山や行かで果せし秋の月

源氏の給に

攔干に夜散る花の立すがた

月見れば人の砧にいそがはし

わが身かよわく病がちなりければ髪けづらんもひつかしと此春さまをかへて

笄も櫛もむかしや散り椿

羽紅の句は七部集のそこ此處に散見す

あの中へ轉んで見たき青田かな　たつ女
松の根よ千代をあやかる野菊かな　知足母
里がよひかいどり前やおぼろ月　蝶羽妻
白菊よまゆづみつくれ薄墨り　春子

如き女ならでは言ひ難く、其人がらも思ひやられてゆかし、

○雛屋立圃

立圃名は親重、通稱は次郎左衛門、また市兵衛ともいふ、京に住んで烏丸光廣卿よ咫尺し和歌の道よあぞひ、書は尊朝親王の風を傳へ、畜は狩野探幽の門よ入り、貞德の薫陶を得て俳諧は松江重頼と相併んで貞門の二客と稱せらる

寛文九年九月、歳七十一

月花の三句目を今しる浮世かな

の吟を辞世として此世を去りぬ、一代の著、はなひ草往万歳、片輪車、硯はいかひ等二十有

五種、

其句、素より凄爽よあらず、幽遠にあらずとはいへど輕妙脫落ぞた捨て難きの妙あり、廻文の數多きなど其才を窺ふに足る、今慶安二年の刊立圃句集よより二三の秀逸を抄せん

廻　文

なるときもなつめにめつなもきとるあ

咲梅や南枝北斗の星の數

梅　月

くらぶるや梅の花かさ月のかさ

霞

佐保姫の十二一重の雲かすみ

空まど ふ厂や霞の一筆繪

出あへ〳〵花盗人よ春の風

海棠もとともよあねふる胡蝶かな

藤づるのめぐるや巴波かしら

鶯と蛙の聲や歌合

螢火は玉藻の前がひかりかな

かゝり火も螢もひかる源氏かな

螢火の一すさきや五月闇

松風の琴の唱歌や蟬のこゑ

吹風を細工よ去たる團扇かな

鬼百合の名も忘らるゝ色香かな

月影は扇流しの川瀬かな

夏の夜や唯邯鄲の假り枕

文月やわざと一筆今日の雲

稲妻や秋來ぬと目よさやの紋

箒木や霧よなみだにかくれんぼ

はころびて廣袖となる尾花かな

鷺よ似て白きは花のむくげかな

月影のさしてさゝれぬ障子かな

ほ覽われ月はたちまち宵の雨

天よ仰き地にふしまちの月夜かな

日をへんよ月の字を去る夕かな

月はすめり我のみ酔へり濁り酒

鳥の渡る空や南方むく世界

月の船の棹よなれ〳〵天津鴈

飛ぶ鴈のながめや文のちらし書

花を見ぬ鴈や紅葉の片ひいき

ちりぬるをかくは紅葉のいろはかな

ませ垣は菊のかをりのふせごかな

色よそみ香よめでたしや菊の酒
秋の日の影は一寸法師かな
雲と風いづれふたつにひと時雨
いつはりの證憑よ木々の初時雨
花ならば朝顔いふよ霜の色
おもしろし散るをば覽じたまあられ
初雪や黒髪山の若白髪
雨降りて地かたまるてふ氷かな
鶯の繪そらごとなる聲もかな
物すきの炭は心のごとくかな

歳暮

春の日も嫁が姑やとしのくれ
うらはつや歳暮に春のたつか弓

○宗因

俳諧は滑稽なり、古今の俳諧歌は狂歌なり、此意味よ於ける俳諧は西山宗因の出づるよ及んで其頂上よ達せりといふべし、芭蕉嘗て評していふ、上よ宗因無くばわれ〳〵はいまだよ貞徳の涎をねぶるべきよ、宗因は實よ此道の中興開山なりと、また奇人談よは、古今俳諧の上手といふは難波の宗因と伊賀の桃青ならでは無しと言ひ傳ふと、さらば宗因は如何なる人ぞ

宗因姓は西山通稱は次郎名は豐一、素肥後の城主加藤家の臣なり、寛永中主家退轉の事あり、はしなく人情反覆の常なく、富貴畢竟頼ひよ足らず、世は敢果なく情なきものなるを悟り冤よ兩刀を投げ捨てゝ二君よ見えず、京よ遊びて里村昌琢よ從ひ連歌の道を究め、宗祇宗鑑守武等の風雅を慕ひ、立圃との爭ひより師貞徳と不快となりて當時同じく昌琢の門よ在りし松江重頼を友とし、傍俳諧をもてあそぶ、是よりさきわづかよ連歌の法式よりて十七文字よ語をあやつる貞徳の俳風、其志想の單純、其詞調の淡泊よして新奇無きを以つてやうやく世人よ厭かれんとするを見、かつは連歌の當世よ後れたるを覩破し、大坂より移つて京都北

野の天滿宮の傍らに向榮庵を結び一句成る毎に神前に奉りて祈誓して神來の奇想を得、わが新に樹立せし旗幟を以つて天下を風靡せんを願ふ、これ其三十一歳の時なりしといふ

此時に當り江戸に田代松意、杉田正友なるものあり、談林軒と號し、其句調日々に變化して一字の働き一句の餘情に世人を感せしめ自ら名づけて談林飛躰といふ江戸に盛に行はれてその頃は其風にあらざれば俳諧とは言はぬほどになり、其調次の如し

嶽々や呑手の若者花修行　松意

雪折やむかしにかへる笠の骨

入相の鐘きゝつけぬ花もかゝ　正友

宗因ゆくりなく東行して江戸に來り、これ等と結托して大いに力を盡くすの手始めとして宗因の

さればこゝに檀林の木あり梅の花

といへるを發句として十百韵を擧行したれは、さなきだに隆盛なりし檀林の一派は此人の奇才を得てさながら虎に翅を添へたらんが如く天和の頃までは、俳諧の名は檀林の專有する所

となれり、されば檀林は宗因の大才によりて大成せしものなれど宗因の創立にはあらず檀林名は十百韵の序に、（上略）時々會合して向後の初心が惡に染まぬを悲しみ端々此事を述べ述へるをたすくる其中に、此席をぞ我等如きの俳諧談林とてそ申すべけれなど戯れけるより起りて皆人談林と言ひならはす云々と是れにて明かなるべし、宗因と言へば檀林を思ひ、談林と言へば直ちに宗因を思ひ浮ぶるほどになりたるは全く宗因の奇才の然らしめしによるなるべし。　其後宗因行脚に立ち出て〻足跡殆んど天下に至らざる無く或は長崎に行きあるいは奥羽に逍遙ひ、自然の風光に其詩藝を滿せしとぞ

凡そ人一方に失ふとあれば必らず其失ひし所のものを他方に求む、求め得ざれば煩悶酷しく其極に至つては自殺に及ぶ、求め得れば漸く安心立命の地を得て微笑するもの是れ人の性なり、されば古來世を敢果無みし不平の士が往々風雅の三昧に遊んで吟詠におもひを遣るものあるは、芭蕉も主君に後れて俳諧にあそび、宗鑑もまた主君に後れて連歌の世界に優遊す、然して芭蕉は彼れの如く宗鑑また彼れが如し、同しく白眼に見る他の世上の人、底の觀想を有しながらも其爲す所行に處、斯くの如く相違あるは全く其人の天賦によれり、宗因また其後者

に似て、既に主家破滅の非運に際會し、人畢のたのむべからざるを見て一意風雅に耽りしより一生の所業、酒脫瓢逸、繩墨以外より躍出せしと彼れが俳句の如くなりし人ならん

宗因の句、滑稽洒落の趣を盡して或は輕妙或は豪放、時としては才より任せて謠曲の文字を弄し、故事を翻用し、其言ひ知らず巧なる「かけ言葉」をあやつりて一句を成す處、上下二千五百年、わが國の文學史に異彩を放つものわり、彼れ涙あれど徒らに泣くものよわらず、世は夢の戲れと見て森羅万象悉く滑稽の材とせざるは無く、是れよりして其作には俳諧の本體たるべき忖情詩よりも叙事詩の多きは注意すべき現象なるべきよやされば自然の幽妙、天地の悠遠を歌ひて崇高森嚴なる趣をかける、其後正風の興るに及んで談林が衰へし原因なるべし、要するに談林の俳諧は宗因の奇才を以つて是れを爲すべし、來山西鶴才歷等相ついで沒するや此流より遊ぶもの非才無識、强いて其形を摸倣したるの極一時の快に誇り奇癖より陷りたの弊

藤の花三尺八すんふべし
ながめ哉さても其後大夫櫻

蛇の道蛇が知る爲いかに時鳥

の如き、反つて疎雜の調となりたるは此非も無し

宗因は俳諧の變を說き、芭蕉は俳諧の正を說く、正を說くものは名香を焚いて秋聲をきくが如く、變を說くものは勇士赤手よして長蛇をさくの壯觀を看るが如し今その二三句を擧げむ

すりこ木も紅葉ちよけり番椒
願くは豆板よちて玉あられ
古歌より曰く千歲ぞ見ゆる餅
やがて見よ捧くらはせん蕎麥の花
松より藤蛸木よのぼるけしきあり

玉霰も豆板ならばと願ひ、千歲ぞ見ゆる餅とのみまては何の奇も無きを僅かより古歌より曰く六字に歲旦の長閑なる景をあらはして一句とちたる、なかなかより及び易からず、蕎麥の花も蕃椒も松に咲きかゝりたる藤も是れを見ると眞面目ならず、縱橫のすよまかせて言ひおぐりたる思はず讀者をちして失笑せざるを得ざらしむ

さ、れは秋とヤすいはれの野邊ゐ
はとゝきすいかゑ鬼神もたしかに聞け
花ひしろ一見せはやと存しゐ
からし酢にふるは涙か櫻鯛
やとれとはゐ身いかゐるひと時雨
鳴るや爰に數ならぬむら雀

これ巧に諺曲を用ゐしもの〻例なるべし

秋はこの法師姿の夕かな
朝夕の人もめづらし今日の春
池水ゑみぜりをいそぐ柳かゐ
世の中や蝶々とまれかくもあれ
秋や來るなふ〳〵夫なる一葉舟

これを正風の句と言はんゑ何の不可あるべき、但し何となく臭みありとは思へど芭蕉の所

謂俳諧としてもよき句たるに害なし、其他許六が此什古今ゑ無しとまで稱讃せし

白露や無分別なるおきところ

の如き、また

有明の油ぞ殘るほとゝきす

の如き、優ゑ古今の風雅界ゑ濶歩し得るの吟詠なるべし、　天和二年三月廿八日、歳七十八ゑして難波ゑ死せしといふ

○西鶴と來山

梅翁の敎を受けて西鶴が天與の鬼才は檀林の詞壇ゑ芳はしき芬をはなち、發しては住吉の社頭の二万三千句となり後來幾千の文士を去て殆んど顏色無からしむ、西鶴が好色本を讀みしもの誰れか元祿の文豪、否、わが國の詩人として西鶴を認めざらむ、鋭利なる去かも精細なる觀察を以つて當時の社會の裏面を描き出して餘蘊なく、上は源氏ものかたりゑ接し、下は桑林子の大作をおしゆ、實ゑわが詩壇の明星たり、散文の詩ゑ於ける西鶴はかくの如くなゐ

よ比すれば其俳諧よ於ける技量はやゝ遜色あるを覺ゆ、

わが戀の松島もさゞ初かすみ

長持よ春かゝれ行く衣かへ

雲の峯や山見ぬ國のひろひもの

鯛は花は見ぬ里もあり今日の月

これ其尤もきこえたる句なりといふ、されど西鶴が俳諧の技量、二世榎林たるよ餘りあり、其椎本才磨と並びて斯界の勇將たりしは言ふまでも無し

來山は泉州堺の人なり、由平よ學ひしといふ蚤く榎林の輕妙を融和して奇巧の域よ入りしと同時よ、悠久の天地よ蕭散の趣をみとめ、正風のいはゆる閑寂の細かみをうたへるもの少なからず

元日やされは野川の水の音

古來元旦の句これよ及べるはあらさらん、かの有名なる

のとけしな豐葦原の今朝の春

水の流れも風のすかたも

は全く此句の祖述したるよ過ぎず

わが寐たを首あけて見る寒かな

雨戸越す秋の姿や灯のくるひ

はとゝきすぬれて帷子一つなり

ひしつては〳〵捨つ春の草

これ榎林よして既よ榎林よ非ず、されば宗因よ大成せし榎林は西鶴よ盡きたりといふべくや、

○池西言水

言水は京都よ產れ、江戸の人山夕と共よ蕉鳴玄札の門よ遊び業成つて元祿年間よ大名ありしと言ふ、玄札貞德の教誨を得て其恬淡の調よ似ず、尤も秀句言ひ掛けよ長せり、其句よいふ

四十二の春

守り給へ今年はやくし十二神

慈を病みし時

卯の花の落つるは風のおこりかな

咲く花のかはどめでたきものは無し

其調大凡かくの如し、彼れ貞徳門よして已よ檀林の句調多きよ拘らす其弟へ子なる言水山夕、二人ながら其句よ其趣無きは奇なりと言ふべし

花いくへ通鑑綱目上野山　山夕

行く水よ口そゝがばや白椿

いな妻や誰が目から出て雲よ入る

言水よ至つては更らよ妙なるものあり

霞みけり比叡は近江の山ならず

木枯の果はありけり海の音

の如き雄渾壯大と評すべく

文もつて禿つきけり闘の船

菜の花や淀も桂も忘れ水

の艶麗なる

尼寺よ唯菜の花の散る經

犬吠ゑて家よ人なし萬紅葉

君來ませ笹の星の羽つくろひ

首たつて鵜の逆のぼる早瀬かな

の如き纖巧勝致言ふ可らず

淋しさも二つの鴨よ笑ひけり

夜櫻よあやしやひとり須磨の蜑

火のかけや人よてすごき網代守

ほとゝぎす櫻は柳よ伐られけり

のさび玄をりのよく調ひたる

是れを要するよ言水の句は玄札より出てゝ玄札よ似ず檀林よ似て檀林よあらず、獨り當時よ

獨立せしものなるべし、家譜によれは松江重頼の門に入りしよしあれど、重頼の調にはなほ似るべくもあらず、宗因の門に芭蕉あり、芭蕉の門に其角あり、師を以つて必らず弟子を律すべきにあらねど、山夕言水の二人ながら其師の俤無きは奇と言ふにあまりあり、言水一度江戸に下り江戸雅慶を著し、京に歸つて都曲集を編む、享保七年九月、年七十三にして死すと言ふ

○俳　諧　論

吳竹の世々のふる言なかりせば、思ふ心をのばへましとい、壬生の忠みねがことば、人丸なくなりにたれど、歌のことといまれる哉とは、貫之が古今の序に見えたり、此人々はさしもあがれる世に生れながら、深くも古へをしたひて、たふとみしにぞ今の世迄も、かがみとはあれりける、さればよろづのことは、古へこそ更にいみじけれ、能賢も、文物も、風雅も、言語も、古へこそ殊に勝れたれ、心をとゞめて世々の撰集を見るに、歌道い後拾遺よりやう〳〵におとろへぬ、世々のふるとも物變り星移りて、いつしかにとなへ失なひ、勝れたる人もより〳〵に多かれど、昔に立歸ることを忘れ、ひたすらに新奇を好み、定家卿に至りて風雅地をはらふ、先師の曰和歌は題詠よりおとろへたりと、知言あるかな、遍序題曲流の数たちて風雅いよ〳〵おとろへ、主あることばの法出て、古言つひに隱る、然あるが故に、みそもじあまり一と文字も、もぢかしとや、思ひけん、連歌といふもの出きて一の宗門をなし、人の耳目を新にせしがば、これめづらしとてもて興ずるはぢに、宗祇法師といふもの、角田川ものの語にかき載せて、歩行人の渡れとぬれぬ袖よしあればと、齊宮の仰せられしを、又逢坂の關は越なんと業平の答、是ぞ連歌の始なるなんど、いかめしう昔にもとめていひのゝしれば、古よりありてふものと世の人も思ひ、こゝに至りて歌道大におとろへぬ、千差萬別こゝに始ぬ、撰集の末に至りて頓阿法師といふもの、和歌を好みしが、連歌は和歌のおとろへといふことを知らざれば、詠出せる歌も躰いやしきのみならず、連歌をも取交へかき殘しゝを、今の世にもてひろごるぞ本意なき、夫和歌はわづかに云出せるより限りなき風調のあるは、とばの雅なれば也、吉田の兼好も古今の言葉の移り行くを思ひやりて、車もたげよ火かゝげよといふべきを、もてあげよかきあげよといふとてなげきし如く、あらき獸のふしぢも、臥猪の床

といへばやさしく、僧正遍昭の歌よ、我落ちぬるなとよみしも、我落ちたりと言ば、いかで聞よ堪ん、わづかのとなへより、一躰の風調を失ふと是よて思ひやるべし、夫古は和歌よ師あし、その世の言葉雅あれば歌り、能因法師始て長能を師とせしと、ふくろ草紙よ見ねたり、古は数を待たずして、賤きものも能く歌を詠めり、春登先生の獨語といふ物語よ、貫之が土佐日記の船人のうたを載せて、昔い下賤の人も言葉の雅あるを嘆せられしと、實にさる事だかし、今の世の人歌よまんほどあらば、是を言葉よ求る事を先よし、俗を捨て雅よつくの外数あし、然云ふ中よ、此道すべらぎの代々永く、松の葉の散失せずして、今の世迄も盡るとと無れど、姿のみ殘りて、うたといふべくもあらず、兼好もその世のおとろふる言の葉を嘆きあがら、古よさかのぼる事を知らで、貫之が糸によるものならあくにとよみしを、今の世のいひ出すべきにもあらずと書しより、後の世の歌詠む人の心ばねに、此道勉めて學び讀むとも昔には及ばぬ事とのみ見かぎりおもふやうにぞありにし、かくのみいひもて行かば、いよ〳〵すゑの世には、古を捨るやうにこそなるめれ、されど徒然の草紙を見るに、その世の言のは古におとろへながらも、風流雅情今樣のたぐふべくもあらねば、いひつゞくるとのは、

昔を忍ばしくぞ思ふ、此草紙をみん人鐵槌よりして後の諧抄とばを解せしのみとるべきあり、意を解せしは皆理よ落ちて甚味を失へりとしるべし、それよりしてこのかた、世い事を楽て移り、事は世を重ねてしげければ、物せはしく人常よあきて、新奇日々に生じ、遂に一躰の俗調又生ず、是を俳諧と云ふ、名を古今集の俳諧歌より求めて、其樣連歌をくじけり、風吟きはめて賤しく、言葉卑俚をいとはず、貞徳芭蕉其宗門をなし、其角嵐雪などいふ者、其風を學びて世にひろごるはどに、今に至りては、都鄙にみてり、予幸に治世に生れ、文物の盛なるに逢ひて、古を好むいとま、世のもて興ずるとの怪しさ、此事好める人のみ多ければ、如何ある樣にかあるらんと、或日芭蕉句撰、次で行狀記あんぢいふものを求め見るに、何れも無病呻吟にして、風流といはんはおこがましくもおもはゆれど、其人素餐の庸人あがら姦猾の風も見ねず、只春秋の造化に感じ、折にふれ時につけつゝ、ひたすらあやしく言出せるより、邂逅におかしきとをもいひ得たり、句撰の中芭蕉生涯の間、言出せる句數おびたゞしけれど、よきい皆人の耳目におのづから觸たり、其餘は句躰はねなきのみならず、何れも無病呻吟なれば、俳諧を知るも知らぬも、見る人の心に止まらず、數百千句の中、聞きつべきものわづか

に指を屈するのみ、其他は聞くに堪ず、和歌變じて連歌となり、連歌變じて俳諧となる、氣運の變化風流のおとろへ、嗚呼かなしき哉、されど俳諧と名付け云得たるさま、又一時の興あり、最も俗に近く、治世に皷腹する民、こぞりて其風をしたふも、下れる世の人情にかなひて、もてひろゞる勢を知らば、しひてそしりいたむべくもあらじかし、末の世には、萬の事、いつしかにものしげくこそなりもて行くめれ、かの川の流れて究まらざるに比ふ、ふせぐとも いかでか止まらん、しげく云はんに愚にもありなん、やむとなく筆をとりぬれば、思ふとを しるしぬ、ついでにかの門ゑ聞ゆる冊子を尋ね求むるに、しげきと牛棟ゑ堪へず、玄峯集、五元集、句兄弟、別ざしき、あやゑしき、許六が風俗文選など、交へ見る中ゑ、貞徳俳諧の俗調たるとを解せず、麥林の口氣連歌ゑ近し、名に實ゑ勝りて其角最もあやし、漫成五倫十牛鉢たゝきの醜言、類に汴するのみ、此門ゑ入る人茫々として美惡を論せず、彼人々の言出せるとの葉に、皆々幽遠の意ありとのみ思ひて、巧拙を辨へず、其角が句に

梅か香や乞食の家ものぞかるゝ

といへば、及びなき妙詠とおもひ、もて興することはいかけれ、世の人惑ふて耳目を失ひき

とやいはん、夫俳諧の字、史記の滑稽傳ゑ出て、日本記ゑは俳諧と書てわざをぎと讀み、漢書に談笑の類と書きしも、みな〳〵可笑しきわざをなし、可笑しきとを言ひて、人を笑ひしむる有樣より出たる文字なるを、あや錦ゑ訓を書きしに、鹵莽論ずるゑたらず、古今集ゑ誹諧と書しに、誹に俳の誤、草書のなだらかなるを、うつしたがへしならん、古今集の俳諧歌、まつたく戯歌ゑして、をばらく實境を去て、可笑しきとを言たるもの也、梅の花見ゑこそきつれ鶯といふより、問へど答へず口なしなど〳〵讀つゞけ、女郎花の咲亂れたるを、色をてらふ女ゑ似たりとて、あなかしがまし花も一時といひ、飛たつ雉子のほろ〳〵とぞなくなんぞ、何れも可笑しきとの葉を迷べたり、上古の風流なる故に、おかしく言つゞけぬれど、尚ほ古雅ゑして味あり、中古の和歌も及ぶ處ゑあらず、今這に古今集の俳諧歌をあげて言へば

枕より跡より戀のせめ來れば
せんかたなみぞ床中をる

前後より戀の責來て苦しき躰をおかしくいへり

我を思ふ人をおもはぬむくいゑや

わが思ふ人が我をおもはぬ

世の中のうき旅ごとに身を投げば
深き谷そこ淺くありなん

俳諧の名是よて呼へ知るべし、吟詠はすべて性情の誠をのぶるものなる故よ、言葉賤しく雅ならざれば、實意をのぶるに拙く、衆聽をそびやかし、鬼神を感せしむるに至らず、孔子の詩をけづるとのたまひしも、言語の雅なるを集め、雅ならざるを捨て玉ふ也、然る故に、俳諧の戀の情をいふと尤も難し、言葉の賤しければなり、戀の情ハ心の誠を言葉にのぶること故、おかしく鄙陋の語は、輕薄にして虚に聞ゆれば、誠のいひ難きとむべならずや、しひて言ハんとすれば、自ら連歌に近づき俳諧の名よ違ふ所考へ知るべし、たとへいはゞ

筆のさや焚いてまつ間の蚊遣かな　尼芳樹

なんぞ、かゝる躰になりもて行く也、近き世とに俳諧の正風躰と高遠に言ひおし、實境をいはんと競ふほどに、皆々無病呻吟になりて、其様身におはず、商人のよき衣着たるにひとしもと

を失ひて俳諧の談笑たるとをしらず、とばを卑俚にして實境を求むるハ、例へハ樫木を撓めて、器とおすが如し、如何でか杞柳を杯棬とするにえかん、和歌は雅語なれば、實境を云ひ、俳諧は俗語なれば、談笑をのぶ、然る故に樫木ハ笄の柄とし杞柳、は器に作るよ比ふ、剛柔所を得て、もの〻自然よ適ふ、世上の才子此境を翫味し、興よ乘じて談笑を言はゞ、奇言佳語おんぞ出ざらん、此道を好める人、芭蕉以下の人々をおんぞ規矩と爲よ足らん、是又其大概を云ふのみ、依て思ふ、和歌は巧拙よ古今ありて、俳諧よ古今なし、其言葉賤しければ也、其世よ生れて其世の言葉を云ふ、いかで難きとわらん、和歌は今の世に生れて、萬古の言葉をもとむ、古今の巧拙唯言葉よ有るのみ、此境を辨へ知らば、巧よ連ね言はんと何ぞ難からん、然はいへど、近世俳諧よ師道立て、門弟を教育し、世よ鳴らんとすれば、師の心高遠よ走り、輕卒の俚言は重威を失ふよりて、實境よもとめ、世よ敎ふるも、又勢の爲す所、其人に之ふるにあらず

或人問曰、之かいはゞ如何して可ならん、曰風流の實境を慕ひ、温淳の雅を好まば、和歌に如くは無し、市中の戯言、談笑をいはゞ、俳諧最も可笑しく面白し、予則戯れに躰を三に別

て、美悪を論ず、談笑を能く言得たるを真の俳諧とす、名に適へばなり、幸に風流を言ひ得て實に似たれども、諧俳の名にもとる、故に是を連歌躰と名づく、言葉のゆるければなり、彌々虚にして風流は論ずるに及ばず、甚だ賤き有様を高遠の雅と心得いひたるを、名付けて俳諧の狂言と云ふ、似て非なればなり、狂言は徳の賊なりと言て、其人孝悌の信もなく、又用ふべき良能もなし、辨佞にして善を好むふりをなし、打見にハ如何にも有徳の君子と見なて、人に馴れ語をてらふ、誠の君子に擬ふ故に、徳の賊なりといへり、俳諧者流の上にて論せば、斯る躰は風流の賊にして、甚まぎらハしければ、苟に例へおきて、三躰に論ず、何れも世の人の耳に觸れ、勝れたりと聞なしを擧てさとしぬ、三躰に別しハ金科玉條と嗚呼がましく聞なんも後めたく、又狂言の名ハ割鷄牛刀の謗も有んかし

俳諧連歌体

若竹や雪のおもみハまだ知らず　麥林
涼しをを竹ゑ殘して晴ゑけり　麥林
夕すゝみ夕貌ひと つ見付けり

蚊帳ひとへしまふて近し鴈の聲　芭蕉
文月や六日も常の夜ゑは似ず
面白し雪ゑやなら ん冬の雨
ものいはぬ子ゑ寒いかと聞く夜哉　讀人不知
馬ハぬれ牛ハ夕日の北しぐれ
青柳の額の櫛や三日の月　其角
雲折々人をやすめる月見かゐ　芭蕉
いゐつまの裾をぬらすや水の上　讀人不知
花さかぬ身ハくるひよき柳かゐ　乙由
是は〳〵とばかり花の吉野山　貞室
咲るみの名ゑさへ花の手柄かゐ　讀人不知
行く秋の道々こぼす紅葉かゐ　麥林
蝶の飛ばかり野中の日蔭かゐ　芭蕉

朝貌やさはらば露ゐもぞるべし　百五十四
むつかしき角ふりおとせ蝸牛　讀人不知
唐崎やよるの雨より蓋の雪
鶯の氷をくだく初音かな　麥林
鹿の音のとゞかぬ山いまだ青し
いかばゐてそよぎたらでや飾藻　讀人不知
たま〳〵ゐ動けば濁す田螺かゐ
くひしばる龍頭ゐ鐘のさゞさ哉　讀人不知
名を付て見る際もなし雲の峯　麥林
はし瓜や沙の干かたの捨小舟　讀人不知
鶯や柳ゐさます梅のゑひ　麥林
初鳫や山ゐくばれば野ゐたらず　加賀千世
めぐり來ぬ山いうらやめはつ時雨　讀人不知

貴菊白ぎく其外の名はなくも哉
縫紋の茶わんゐとけてなつゐ哉　讀人不知
入相ゐ散る花もなし秋の山
花一つ袂ゐ御乳母の手出かゐ　其角

此數々は風流も言適へしやうゐて、風調最面白し、されど皆連歌より出たる体ゐて、十七字ゐ止まりかね、下の句をふくむ心あり、是三分の俳諧ゐ七分の連歌混合して、實境を言はんとねがへども、實境は和歌を先とす、壬生忠岑が歌ゐ

いづ方へ鳴て行らん時鳥
淀のわたりのまだ夜ふかきゐ

たとへ言はんい霄壤の違ながら、言葉の上ゐ論せば、三そもじ餘り一もじといふと、和歌の妙詠也、さしてむつかしき風情を言ふゐもあらず、わづかゐ一首を唱へ盡すより、限ゐき佳境ゐ至り、人を感動せしむる事、實境の絶妙ゐらずや、それを足らずとして出入をなし、旋頭歌とし、連歌となすとも、何んぞ風調の妙ゐ入らむ和歌の風流を俳諧ゐいはんとて其角が五元

集より

川むかひ誰が屋敷へかはとゝぎす　讀人不知

郭公を詠ずる情は和歌よりひとしけれども、言葉の節調を格調を知らぬ市中の俗は、是れなん限無き風流と思ふらむいと口をし、唯在明の月ぞ殘れるとよみしを、月が鳴いたかと口吟みしてそ、眞の俳諧を得ておかしく面白けれ、實境の和歌を俳諧の談笑より言ひしは、はじめより勝る事万々

眞の俳諧

野は枯れて狐の穴も月夜かな　讀人不知

せい出せば氷る びまなし水車　珪琳

はげ山は秋のとりつく色も無し　讀人不知

あみいかなだまされて咲く室の梅　仝

うへを下ねいとう山の花見かな　仝

蜻蛉や飛びなはしても元の枝　仝

露の飯は出來たり梅の花　仝

やがて死ぬけしきも見ねず蟬の聲　はせを

此句俳諧者流、蟬の春秋を知らぬ感をのべたりと思へり、情甚だいやし、實境をもとむる故なり、句者を談笑よりとりて、蟬のやかましくにぎやかにて、無心のさまなりと見る時いおかしくおもしろし

ふくろうのねやうとすれば時雨哉　麥林

淋しさの急よはしれぬすゝきかな　鬼貫

あさかはよおくとは露のつよみかな　讀人不知

螢火や月のとゞかぬ岩のかげ　仝

蝶々や菜よも花よもうはきもの　仝

梅若は十六日があはれ也　仝

淋しとも鹿い鳴ぬよ聞上手　仝

仲人のうそつみませる嫁菜かな　麥林

つばくらや何を忘れて中かへり　仝
しだり尾の長屋〳〵よ菖蒲かな　讀人不知
散ぎはゝ風もたのまず芥子の花　其角
行すゑい誰がはだふれんべにの花　はせを
香霧散犬がねぶつてくもの巣　其角
卯の花よはつとまばゆき朝寢かな　讀人不知
千とり哉禿手と〳〵〳〵で　仝
後から鐘をあびたる花見かな　仝
草足袋や昔はもみぢ踏分たり　宗因
月ひとり殘して仕まふおぢりかな　讀人不知
鐘つきの今年へおりるはしごかな　仝
思ふといはで只よやんねこの戀　仝
玉あられ金なら孫らよとらせたい　仝

なべて世よ俳諧を翫ばん人この風調をもとめば妙よ入りやすく、又此人〳〵よ勝れて奇言あらん、言葉姿名に適へばなり、躰おかしからざれい、俳諧よあらずと知るべし

俳諧の狂言

立出て後あゆみや秋のくれ　讀人不知
名月や池をめぐりてよもすがら　芭蕉
うまずめの雛かしづくぞあはれなる　嵐雪
野を横よ馬ひきむけよ郭公　芭蕉
見渡せば詠むれば須广の秋　仝
枯枝よ烏のとまりけり秋のくれ　仝
三井寺の門たゝかばや今日の月　仝

此數句一度吟じて嘔吐を催す惡むべきの甚しき也

夏の月蚊を痩よして五百兩　其角
雪の日や船頭どの〳〵貌の色　仝

御秘蔵のすみをすらせて梅見哉　　仝
藪入や早いにろくなつらいなし　　仝

いづれも無用の妄語にあらずや

松原のすき間を見するしぐれかな　　讀人不知
いなづまみかぢななびきそ月夜船　　仝
山里い万才おそし梅の花　　芭蕉
柳よいつゝみもうたず歌もなし　　其角
花の雲鐘い上野か浅草か　　はせを
三味線も小唄ものらず梅の花　　來山
我雪と思へば輕し笠の上　　其角

わが笠よつもる雪をかろしと思ふとい人情になき虚をいふて、風流と思ふ、抱腹ま堪へず、却て雅情よよらば、我雪とおもへどおもしといふべきか

鹿の聲こゝろよ角いなかりけり　　麥林
是もまた伊達のうすぎや紙ひいな　　讀人不知

紙雛のさうくしさよ立姿　　其角
初しくれ猿も小簑をはしげ也　　はせを
はつ午や白い梅より赤のめし　　讀人不知
はつ午に狐のそりしあたま哉　　はせを

虚實風流ともにいづくにかある、又無病呻吟なる哉、誰人かかくもあらんものか

夕立や法華かけこむあみだ堂　　其角
上手ほど名も優美なり角力とり　　其角
ふる池や蛙とびこむ水の音　　はせを

此句絶妙也とて世の人も俳諧者流も、甚嘆美す、予ことよ笑ふところなり、春秋の夕べは、古今風流雅士の概景よして、吟詠尤多し、實境こゝよあり、此句やさびしく閑なる閑居の体をいふなり、意味言外よありなんどおもふべけれと、とびこむといふ言葉、至て輕卒の鄙言

あれば、談笑にいはゞむべなり、風雅の感詠と思はゞ笑ふべきの至りなり、強て言ば松乙とやらんいふものゝ句ゝ

かしましい聲で淋しき蛙かな

初ゝ勝る畢竟々、眞の俳諧ゝ於てゝ歸月が口ずさみし

降るあめゝたゝかれて鳴く蛙かな

又白雲といふものゝよく俳諧の談笑を得たり

蓮の葉ゝとんでひつくりかへる哉

風調きはめておかしく面白し、同日の論ゝあらず、裁斷せば大概かくの如し、又三躰の外ゝ、七句をわかちあげて、一風を判じ、左に記す

哀なり墓所の葬四ッ時分　讀人不知

かんこどり我も淋しいかとんて行　麥林

菜がくれの五日の月やかしい併　讀人不知

夏草や兵どもが夢の跡　はせを

雪の日やあれも人の子樽ひろひ　其角

こゑかれて猿の齒白し峯の月　仝

ゝよひ子の泣く〳〵つかひはたるかな　讀人不知

此風調ゝ俳諧より出て、よく實境をのべたり、それ言語の道世〳〵ゝしげく、松の葉の散うせずして、濱の眞砂子の數つもりぬれば、千態万化かぎりなき中よりいたく此道好める人は、斯かるとをも言出すめり、とわりていはゞ、一句を雅語より求めば、二句ゝ極めて俗語ゝあすべし、此意より考へ入る時ゝ、實境を得て俳諧を失はず、右ゝ記す七句は、風調も言語も、雅俗を三句ゝまじへいふを見て徴すべし、されど前章ゝ論せし談笑だゝ言ひ得難きゝ、俳諧より出て、實境と風流をかね言はんと、杞柳の例の如く、難の難なれば、いたく苦しみ求むとも、無病呻吟ならん、三躰の說を翫味せば、實境も又不用意ゝ出て、自づから得んものか

右に論ずるかず〳〵ゝ、佳句也とて、世の耳目ゝふれたるをあつめぬ、その門ゝ遊泳して、深くもとめば、勝れたるもあらん、世の人菽麥をわきまへずして、虛實所を失ふのみ、予が主意爰にあり、かつて思ふ、今の附合といふもの、是眞の俳諧ゝして、談笑多く見ゑたり、其心を

もとめて、十七字よのべは、奇言佳語立所よ有らん、すべて此門よなづめる人、此說をきかば、其意を解せずして、爭心たちまちよ出でん、只心を平よして蕉穢をさり、心胸よ横はれる怒氣臆度を除いて靜よ爰よ求むべし、自ら氷の如くよ解けて、區々たる理屈をのがれん、總て諸子百家の道より、技藝よ至る迄、みな見識といふものをたてゝ、問ふことを好み、一をこりて百を廢せず鎖々たる理學を出ずんば、何ぞ卓越の靈惠を長せん、爰よい只一端をのべて、同者に示す爭ひを求めて人よ强ふるにあらず

以上は寶曆六丙申歲、橘のよしふるなる國學者が俳諧よ對する議論なりとす、素爲めにする所ありて吐きしあらばいざしらず、さらずはあまりなる僻說といふべし、俳諧といへる字義を全く滑稽の意義よ解して、其他を問はず、芭蕉をはじめ正門の諸子が解釋したる意義には全々無頓着よ看過し、論の立脚點を滑稽の上よ置き、滑稽あらぬを、俳諧よあらずとしたるは論の是非は兎も角も無法なりといふべく、妙は餘韻よ覓むべき、正風の句どもを連歌躰ありと退ぞけたるなど門外漢の言と言ふを憚らず

されど寶曆の頃は蕉翁の滅度を去ると凡そ五六十年、正門の耆宿、其角嵐雪、丈草去來等

漸く世を謝して、所謂幽玄をうたふといふ句が、千篇一律の無味よ陷りしを嘲りしかとも思はるれど、さりとてはあまりよ横ざまなる論ならん、素より或る意味よ於いては詩は物質的開化よ反比例をなすものなれど、一概よ和歌は古代よ限り、俗語を交へたるが故よ野鄙なりといひ、その詩的趣味を云々するよ至つては笑ふよ堪へたり、論かくの如くつまらぬよ關せず、長々と抄出せしは一派の國學者が俳諧よ對する志想を知らんと欲してなり、

○丈草禪師

芭蕉が言葉の俳諧を傳へたるも尠からず、寶晉齋といひ雪中庵といひ、五老井といひ獅子庵といふ、しかれども心の俳諧に至つては丈草禪師を除いて他に是れを傳へしものを見ず、

丈草姓は內藤、通稱は林右衛門、世々尾州犬山の重臣なり、年廿五、家を出てゝ剃髮し先聖寺よいたり玉堂和向に參じ、常に法華經を讀誦す、その頃の吟なるべし

凉風に消ゆるを雪のやどりかな

既に塵寰の人よあらず、いつの頃よりか芭蕉にまゐぴて、俳諧の虛實にあそぶ、去來が誌に

いふ、先師の言に此僧、此道にすゝみ學ばゝ、人の上に立たんと月を越ゆべからず、其下地のうるはしきとうらやむべし、然れども、性苦しみ學ぶとを好まず、感ありて吟じ、人ありて談じ、常は此事のうち忘れたるが如し（下略）是れ去來が見たる丈草として、また禪師が半面は巧みに描寫したりと言ふべし、

春雨の蜂の巣、これは誠に世の人、左程に沙汰をせぬといへども、奇妙天然の作なりと、翁も常々吟じ申されしとなり、此蜂の巣は、去歳の巣の、草庵の軒に殘りたるに、春雨のつたひたる靜さ、おもしろく言ひ取りたる深川の庵の躰、其儘よて幾度も落涙いたしゐ、凡俗を離れ侍る句なり、よせ物、とり合せものと心を付けゐば、作に落ち入り、彌々妙より至る事あるまじくゐ、初心の輩は其道具に尋ね迷ひ、一代風雅をとりとめずとあるまじくゐ、翁死後よは東西の門人、丈草を慕ひ申すよ、此人さのみ世よ差し出でたるほどの事も無くゐへども、翁の作神を得られゐよや、うらやみずとよてゐ、是れ野坡が許六よ與へし書翰の一節なり、實よ丈草はさのみ世よさし出でたるほどの事も無く、評論をも事とせざりしなり、集をも編せざりしなり、興あれば吟じ、興つくれは去つて風月よ嘯き、優遊自適、强いて拘束せ

ず、心の欲するまゝよ振舞ひしなり、翁の作神を得られゐよやうらやみ申事よゐとは、やがて俳衣を意味せるおらむ、また、或日翁幻住庵よして終日丈草よ對して俳諧のものがたりありけり、正秀傍よあつて是れを聞くよ、一事として其意を會せず、其後龍が岡よまかりて此事を丈草よ問ふ、丈草曰ふ、わが問ふところは言語の俳諧よあらず、禪の俳諧なり、正秀問ふ、禪の俳諧とは如何、丈草が曰く、山は只青山、雲は只白雲、芭蕉は實よ達磨なるかと、正秀は蕉門の奇才なり、而して終日傍よ立つて一事も其意を會する能はず、却つて丈草よ問ふて、山は青山雲は白雲、はせをは達磨なりとの答を得しも終に理會よ苦んで空しく呆然自失せしならむ、俳禪遂に語るべからざるおり、然るよ芭蕉の沒後諸門人の丈草を慕ひしといふものは、所謂翁の作神を得たる其句かおのづから人の肺腑に感銘せしよよるおるべく、詞の俳諧も茲に至つてや、敬すべく尊ぶべし

多年負屋一蝸牛　化做蛤蟆得自在
火宅最惶涎沫垂　偶尋法雨入林丘

是れ剃髪の當時口吟みし所おるべく、また雪つて新道心なよがしに與ふる辞のうちよ言へる

あり、曰く

世を遁れ道を求むるほどの人い、皆ひとかどの志を發し、まことしきつとめもしあへれど、年を重ぬれば又彼此にひかるゝ縁多く、事繁くおりて、更らにはしめの人ともおぼえぬ振舞のみぞ多かる、古人も此事を誡めて、出家い出家以后の出家を遂ぐべきよし勸め勵ましぬ

（下略）

百六十八

蚊屋を出てまた蹠子あり夏の月

世俗の紛擾をみるの眼を閉ぢ、火宅よ涎沫の盡くるを惶れて向上の一路に辿る禪師がおもかげのはのめくよおらずや、徒らよ風月よ嘯いて優游自放なりしよあらざるい言ふよ及ばず

傘と剃刀をさへ持たぬ身の上かあと、よしあき貧乏自慢が高じて、明日ある人の許へ齋よ呼ばれしふに、鬚は汁を啜る邪广よなり、雨は衣の袖をぼらむとを思ふよ、ひしと困り果てゞしい、よく〳〵磨きすまして一挺、たとへやぶれかゝりても一本は貸し被下べくしい（下略）世外よ超然たる飄逸なる半面は此斷簡よよりて躍如たらむ

禪師十三回忌よあたりて、弟子方舟魯九が徒、はじめて其著ねころび草を梓よのぼす、出離

の要道を說く懇篤をきはめ、文字また金石の響あり、蓋し得易からざるの俳文なり

心にまかせたる身ならば、いかでかゝるものうき世よは生れ來らむ、已よ斯く生れ來て、ものうき世の中よいかで此身の心まかせあらんや、なは此末々も、山水の定らぬことはりを悟ると無く、唯目よふれ耳よ觸るゝ種々を、まことゝのみ思ひ暮らさば、如何なる境よか迷ひ、いかなる苦しみをか受けなむ、明日ありとおもふ心よはだされて今日も果敢なく暮らしぬるかあと聞ねしい、昔も今も此道の心にかゝらぬよはあらねど、ひしと思ひきはむる人はまれなるにこそむべなるかあ、世の人ももの心つきて、物ごとえのはしく、いつと無く、さし向ふ鏡のうちより、かぎり無き色よめで迷ひわが粧ひをつくろふは、人のよそはひに迷ふが爲なり、さて〳〵品々ようつれるい、ねたみの角たゆめるひま無く、心ひとかたよなづめるは、おもひの及胸をけづれり、來る夜もあくる夜も、うつゝなきまよひよ、あと追ひかくる髻髮重、いくらともおく出で來て、燈火の下、爐のほとりよ、はまの坐とりまはしたるは、いつのほどの年月よやと、うち驚かれける夫婦の顏はせ、眞葛が原よ風さはぎし情も、いつしかあら竹のすげ無き友ずれの聲、梅かをる月影も消ゑつゝ、はし菜かけたる軒の松風とは吹きか

百六十九

へば、貴きもいやしきも、身をわけたるいとをしみは、野よも山よも離れ難し、たま〳〵よ捧ぐる佛の花をだに、まづ是れを與へて、そばしの泣をすかし、其咲顔よ老の涙をすゝむ、これよりして道の心いよ〳〵少く世のいとなみ、骨をたゆめるにひま無し(下略)是れ其發端なり、いかゐる筆を以つていかなる事を說くかは知るよあまりあらむ、次に抄せるはうつり變る四季をり〳〵のけしきにつけて無常の迅速を說ける正月のありさまなりとす

つら〳〵世の儚なきならはし、あら玉の年立ちかへる注連かざりゐ、千代かけてさしそふ初日影とことぶきあへれども、わづかなる齡のはや一日をとづめて、終の薪の身をからし行く光ならずや、松い蓬萊にひかれて千年の陰を失ひ、竹は左義長よ燒かれて百尺の綠をたふす、鳥海老の生きながら煮られて、さしも苦しげにかゝまりたる姿にあやかれなどいへるはいかよぞや、田つくり數の子は、よし無き名のつきたる故よかばねをさらし、雉子の頭は生けるが如くもたげしめ、鯛の尾はどびかへるべく跳ねしむれども、いつしか落ちくぼみたる眼のうち、うらめしげよ牙噛いたしたる、いささかも悅べるけしきは見ねず、これのみならず海よ漁り山よ狩りし、いま〳〵しき腸つみかさね、股かひな、血汐よ引きちらして此日の

賑ひとす、もの〻生命を奪ひておのれを立つるとは殘害の道なり、年月日のめぐみとむる三つのもとを慎みて、齡ひを延べ生命をもたむとおらば、かゝる類も憐み救はんこそ、天つ心よも恢ふべきものあるを、物言はざればとて、生命の惜しからざらむや、かたはしより屠り苦しめて、あはれよき彩かなと言今を、彼等がためよは今日いかなる惡日ならん、さこそ夢見もあしく迷ひ出でたるらめ、かねて賓船をも敗かせて、此難をも救はましさとよ、老の枕のあたりよも貶の札ひらめかして、何事も夢の世の中とは、露おもへる景色も無し、香染の袂ひらめく法師まで、忌み言葉よ身の毛よだつ、此日なればとて死門のふさがるべきかは、慈惠大師の終焉の眦をとめし、一休禪師は髑髏を捧げ洛陽の貴賤を戒しむ、かりの名よ迷ひ限り無き罪をつくるとをいさめり、かゝる折ふしよも世よまじはらぬ病の床よは、眠りをづかよ足りて、つね〳〵の念珠忘るゝとなく、あら玉の年をかさねて、心の玉の光やはらぎ、やゝ解けそむる氷の浪いさぎよくそゝぎて、花に柳ようつり行く、桃の節句ゐ(下略)

閑田子いはく丈草禪師のねころび草ゐ、其名はねころび草なりといへれど、ねころひてゐ讀み難きものなり云々、當時もてはやされしを知るよ足る、ねころび草の名は其うちの一節に、

たゞ曉の寐覺がちなるこそ、夕の空ゑづかなる時に、ねころび草のかりなる言葉を思ひはかりて見るべしとあるよより負ふせたる名ならむか

句の「靜」なるとは蕉翁第一なりとの當時同門の定評ありといふはさもありぬん

うつくまる藥のもとの寒かな

是れ芭蕉か難波の病床よ夜伽の時の吟なり、丈草出來されたり、いつ聞きても寂寞(さびしなり)とゝのひたりと師翁の感せられし言ひ傳ふ、人のあまねく知る處なり、一部丈草句集を繙くもの誰れか禪師が風流のおもむきを認めざらむや

梅の香よ迷はぬ道のちまたかな

かけろふや塚よりほかよすひはかり

師翁の沒後、むかしを偲び出でゝわか身をかへつの情言ひゑらずあはれなり

とりつかぬ心で浮ぶ蛙かな

鶯や茶の木畑の朝月夜

大原や蝶の出て舞ふ朧月

春雨やぬけ出たまゝの夜着の穴

木啄や枯木をさかす花の中

或は清楚、あるひは艶麗、興を伴らず、巧を覓めず、ゑかも巧よして巧よ失せざる、感するよあまりあり

時鳥鳴くや湖水のさゝよごり

菜種売焚くや野風のほとゝぎす

前のは言ふまでもあくほとゝぎすの妙句、古今よ獨歩せん、後の句は、われ去年歸省の途上まのあたり此景を睹て其妙を感すると酷し

松風を中よ青田の戰ぎかな

はね釣瓶蛇の行方や杜若

青雲や馬鍬休むる畦のけし

白雨よ走り下るや竹の蟻

世の中をなげ出したる團扇かな

精霊の好かれし人を集めけり
精霊も出てかりの世の旅寢かな
悔いふ人のときれやきり〳〵す
行燈よ飛ふや袂のきり〳〵す
寐かへりの方になしむや蟋蟀
つれのある處へ掃くぞきり〳〵す

病床

虫の音の中よ咳出す寢覺かな
脱殼よおらびて死ぬる秋の蟬
蘆の穂や顔撫上る夢さかり
ねはり無き空を走るや秋の雲
飼猿も秋はことさら山の聲
黒みけり冲の時雨の行きところ

夏人か時雨駈けぬく潮田の橋
石經の墨を添ねけり初時雨
待受けて經會く風の落葉かな
狐の聲そろふなり雪の暮
狐鳴く岡の書間や雪曇
雪くもり身の上をなく烏かな
鹿の目の枯野よすはるあらしかな
あら猫の駈け出す軒や冬の月
若て立ては夜のふすまも無かりけり
影法師の横よなりたる炬燵かな

江州粟津の龍が岡よ庵をむすび佛幻庵と號しけるか、芭蕉の沒後よは義仲寺のかたはとりよ移りて供養怠り無かりしといふ、ひとり芭蕉が正法眼藏を傳へし己耳ならず、一身の道德家としても優よ蕉門の白眉と稱すべし、齢四十有二、寶永元年二月を以つて寂を示すと傳ふ、或は

言ふ齢四十有五と、春風秋月、爾來二百年、龍が岡の夕照、微風苦を吹くのあたり禪師が遺骨永く茲ゑ清く、魂魄とこしなへゑ相羊せむ

○五老井許六

その直指傳のうちゑ言へるあり、曰く、其角支考は下手ゑては無し、先師の口癖はよく其似ける、芭蕉流ゑあらず、芭蕉流正風躰の血脉を得たるものは我なり、當時は俳諧ゑ醉ふて甲乙を知らず、後世は忽ち醒めて善惡を定むるゑ遠慮なし、其遠慮無き人ゑ正風躰を示すとて、三月並

今日限の春の行衛や帆かけ舟
春なれや田の青苔ゑ啼く蛙
四五月の卯波さなみや時鳥
わが跡へ缺口立ち寄る清水かな
欄干ゑの匂ふるや菊の影法師

看經の間を朝貌のさかりかな。
初霜や鐘樓の道の香のあと
はつ雪や治る江戸の人こゝろ

是れ先師滅後の句なり（清水の句は許六がはじめて芭蕉ゑ深川ゑ見(まみ)えし時耳ゑ達せしよし一葉集ゑいしるせり）先師生前の耳を驚かせざるも無念ゑして、今又一人も此句の膓を聞く人無きこそ猶はまた無念の事なれ、後人芭蕉の血脉嗣ぐ人なしといふ事勿れと、何ぞ其語の壯にしてしかも自讃の太(はなはだ)しき、また抄ゑいふ、元祿五年七月東武ゑ赴く時、翁ゑ對面せんことを悅ぶ、橘町より深川芭蕉庵を再興して入り給ふ年あり、江戸着の日數を經ず、桃隣手引して、八月九日、深川の庵を敲く、是れ師弟の契約のはしめゝ、一座嵐闌桃隣尋求法師なり桃隣いひけるゝ翁へ發句持參あるべしといふゑ任せ、桃隣執筆して四五句始めて呈す

七月十四日の夜島田金谷の送り火を見て感をます

聖靈とおらで越えけり大井川
十團子も小粒ゑなりぬ秋の風

棧のあぶなげも無し蟬の聲
我跡へゐくち立ちよるしみつかゐ

この外もありし、おぼえず

師見給ひて曰く、就中宇都の山の句大きゑ出來たり、其ほか清水棧の句もよしと數返感せられたり、大井川の句ハ其時すこし加筆あり、余つく〳〵不審を生じ、再返聞きかへし、宇都の山の句よく侍るやと言へば、なるほどよしと宣へり、余が聞きかへしたるとを不審ゑ思ひ給ふや、翁曰、許子は愚老ゑ對面し給ハざる以前愚老が門人ゑ對面し給ふやと問ひ給ふ、予が曰、しからず、尙白ゑ一度對面しける後ハ、ひたすら曠野猿蓑の二集ゑ眼をさらし、壹夜句を探るとひま無し、少し探り當てたりと思へば、迹より師の吟じ出し給ふ句大きゑ相違せり、其風を探り見ればまた迹の句似たる形も無し、壹夜吟腸を斷て漸う此宇都の山の句を得たり、此句二十句はかり仕盡き、二日案じ煩つて後、小粒ゑなりぬといふとを取り出したりと答ふ師曰、先達尙白との問答一々聞きたり、今日許子の句を見るに、專撰集に眼をさらしたると明なり、愚老が魂を探り當てられたり、愚老が魂を集に探りあてたる人は、門人並に他門

ともに許子一人なり、壹夜此魂を門人に說くといへども通じ難し、愚老が本望今日遂せりと、大いに悅び給ひ、撰集を見ると許子に及ぶ人あるまじと返す〳〵稱し給へり、予不審出來つく〳〵思ふに、俳諧はいひ勝ちと平呑ゑ呑み切て居る時、師曰、許子が俳諧と晋子が俳諧とは符合せず、愚老が俳諧と許子が俳諧とは符合すと宣へり、此一言に力を得て懺悔す、予が曰、されば今日對面のはじめより予が心中大い心迷へり、此御一言ゑよつて少し力を得たり、予高翁に對面せざる以前、晋子が方へ点を乞ふ句百四五十あり予がよしと思ふ句ゑは点稀ゑして、言ひ捨ての句に褒美の点あり、今日師の感じ給ふ句、大かた一点の句々、然る處に師殊の外に感じ給ふ、予が不審こゝに在り、師の高弟は晋子あり、師弟の胸中かやうにかはりては、たのもしからず、畢竟俳諧は言ひ勝ちと決定し侍るあり、又問曰、予が俳諧と晋子が俳諧と符合せざること幷びに師の風雅と予が風雅と符合せしとを述べて不審をあかし給へと申せば、師曰、許子俳諧をすき出づる時、閑寂ゑして山中にこもる心地するとを說び元來俳諧をすき出すやと宣へり、答曰、玄かり、師もすく所かくの如し、晋子が好く所はかつて此趣ゑあらず、俳諧は伊達風流にして作意のはたらき面白きものとす、出來る處相違あり、故ゑ晋

子と許子と符合せずと宣へり、始めて眼をひらき一言によりて筋骨に名銘するが如し、又聞曰、師と晋子と師弟は、いづれの處を敎へ習ひたりと言はむ、師曰、予か風、閑寂を好んでは、そし晋子が風、伊達を好んで細し、此細き所、予か流なり、爰ゑ符合すと申されたり、又大いゑ感ず、又問、予が探りあてたる處、眞の俳諧の血脉ゑ侍るやと言へば、此所毛頭うたがひあるべからず、心を正しくして俗をはなるゝ外なしと宣へり、其日は退出す、其後予が旅亭に招きたる時師の雜談に曰く、愚老許子に對して多年の大望を遂げたり、嵐蘭子の曰く、いづれの道ゑ愜ひ侍るや、師曰、われ國々の人に對して俳諧の器を求む、求め得て直指の法を附すべきと思ふと日々ゑ有り、今撰集を見てわが勝を探り得たる人は許子なり、千歳の後も許子が如き人世ゑ有るまじきと思はざれば、強いて器を求むることを止めたり、今日の望は性痴ゑして多年大いゑ執心をかけるといへども皆て動かざる人あるべし、是れは愚老がたすけゑよらざれば道ゑ入り難し、器のすぐれたるは敎へずして至ると言へり、許子が本性を見るに愚老が求むる處に大方は愜ふ人なりと宣ふ、嵐蘭子曰く、其といふかし、一々論し給へといへり、師曰く、器の勝れたるもの是れ第一なりこれ一つ、大いゑ此道ゑ執心の人、許子は寐食

を忘れ財寶色慾ゑかへる人なり、これ二つ、四十を越す人ならず、やう〳〵三十七、これ三つ、いとゞ有る身ゑあらざれば道を行し難しこれ四つ、貧賤ゑして朝夕ゑ苦しめる人ならず許子富貴ゑあらずと、雖も商賢の士ゑ穢れず、是れ五つ、許子博識ゑあらずと雖も和漢の文字ゑ乏しからず、珍頑が如き人ゑあらず是れ六つなり、此六つのもの揃ひたる人稀なり、二つ三つは兼ぬると雖も六つの品具足したる人まれなり、手筋よし器よしと雖も手筋のわしきはならず、速ゑ俳諧の底をぬかせんと宣へり、門弟のうちゑ底をぬくものなし、曠野の時を得たりといへども、ひさごゑ底を入れられ、ひさごは猿簑ゑ底ありて、古今を隔らる、底のぬけたるものは新古の差別なし、昨日今日また明日と流行して、一日もこれを止めずと宣へり、その頃の愚句

寒菊の隣もありやいけ大根

とせし時、酒堂が句ゑ

雞や梠たぐ夜の火のあかり

と時を同しく得る、此兩句翁論じて曰く、世間俳諧するもの此場所ゑ至つて案ずるもの無し

と稱し給ふ、予曰、我久しく色々の風を學ぶ故に新古の場はたしかに覺ゑたるなり、此場所より外に案し出す所は無し、ゑかれども、能句稀なるを歎くとヤせば、師、好惡は時のよろしきよつくと示し給へり又曰、愚老が俳諧は五歌仙よ至らざる人一生涯よ成就せず、大事なり覺悟せよと申されけり、予師と俳諧する事全篇たしかよ成就する卷二歌仙半分よみてさる卷二以上四卷なり、師曰、愚老相手となりて俳諧すると三四度なり、いつとても雖々と俳諧するはかやうのものと容易よ思ふと勿れ、眞の俳諧を傳ふる時は我骨髓よりあぶらを出す、必ずあだよ思ふとなかれと、大いよ恩を示されたり、その正月、予か亡母の七年追悼よあたる、心易き相手求めて歌仙一卷遂よ成つて師よ呈す、師、是れを讀んでかつ悅びかつ稱す、予が曰、師の流此歌仙の外よ有らば、予が俳諧遂よ本意を遂ぐると能はじと申せば、師曰、全く是れなり、うたがひ侍ると勿れと、大いよ感せり、其後三月盡の日より卯月三四日まで、予か宅よ入つて逗留ゑたまふ、昼夜俳諧をきく、其後翁曰く、明日更衣なり、句あるべし聞かひと宣へり、かしこまりて三四句吐き出すと雖も、師の意よ愜はず、師曰、當時諸門弟俳他門ともよ、俳諧たしかにして疊の上よ坐し釘鎹(くぎかすがひ)を以つて堅く去めたるが如し、是れ名人の

遊ぶ所よあらず、許子が案ずる所も是れあり、風雅のほかに子が得たる藝能を察せよ、名人は危き所よあそぶ、俳諧あは斯くの如し、仕損じまじき心飽くまであり是れ下手の心よして上手の腹を知らず、予か當歳旦よ

年々や猿よきせたる猿の面

といふ句全く仕損じの句あり、ふと歳旦よ猿の假面よかるべしと思ふ心一よしてとり合せたれば仕損じの句あり、予の曰、名人師の上よも仕損じ有りや、師曰、毎句あり、予此言を聞いて言下よ大悟す、おそらくは向後予が句、仕損じの場所ならでは一句もあるまじ、聞き給へと廣言をはなつ、予あやふきつり合ひは探り得たりと雖も、心中仕損ずまじき心飽くまでゑ、此一言よ依りて仕損ずる處を決定せり、時よ

人さきよ醫者の袷やころもがへ

といふ句をいひ出す、師掌を打つて曰く、奇あるかあ奇なるかあ是れあり、俳諧の底は、此句よてぬけたり、一言下よ大悟するものはあれど、一言下よ句をするものなしと感せられたり、此句秀でたる句よあらずと雖も、血脈の正しき所より出てゝ、第一更衣よ氣をよく付けて

人の及ばざる處を感せられたりと

また曰く、(上略)それ理屈を離るゝや易し、理屈をはなれたる後は趣向を離れ、手ゑ携ふる一物も無し、人麿のほの〳〵、赤人の田子の浦の場所は、先師の俳諧ゑして、ふる〳〵さびかへりたるとは、たゞ百人一首の歌を見るが如し、無爲の妙句は言ひながして盡きず、跡に光明をはなつ、理屈の句はつまりて跡へもどる、これかの光明をあやまり覺ゑて、終ゑ理屈の境を知らず、和歌は貫之より其後後成に傳はり、連歌は宗祇宗長とつゞく、今先師の俳諧血脈相承のものの無しと言ふと勿れ五老井許六こゝに在りとて、予短才未練なりと雖も、一派の俳諧ゑ於いては、大敵を受けて一方の城をかため、大軍を眞先駈け、一番ゑ討死せんとする志鐵石の如し、故ゑ同門の嫉み嘲りを顧みずまた、先師の腸べ下駄はきて入りこみたるはわれひとりなりなど放語を逞しうし、憚なく自讃の辭をつらぬるもの豈胸中自らたのむ所なく省みて已れゑ疚しき所無きゑあらざるよりはいひ得るの言ならむや、其放言もむしろ敬すべく愛すべきものあるをおぼゆ

その剛氣自尊斯くの如く、總べて同門の士を見るゑ獨狗を以つてし、一種矯健の雄筆を揮ふて縱横ゑ罵倒せしものから、端無く嫌惡を來し、去來が、我蕉門ゑ年久しき故ゑ名は高けれども句ゑ於いて、その靜なると丈草ゑ及ばず、その華やかなると其角ゑ及ばず、輕きと野坡ゑ及ばず、仕ふると土芳ゑ及ばず、巧なると正秀ゑ及ばずと評したるが如き其一例といふべし、されど許六が鋭利なる筆鋒に畏れて、多くは避けしものゝみなりしといふ、然るゑ隨齋諧話中ゑ云るせる、教を受けんとて訪ひし士人に對ゐて、われ俳諧ゑ何の心得たる事あければいなみ申すなり、著作のものどもゐ皆一時のたはふれ事ゑていぞや、あのたぐひの書けるものをもて賢とし給ふは痛み入りたる事あり、素より根無し事あれば、必ずそれゑすかされ給ふなと言ひしが如き、また智月尼に贈りし消息ゑ

は床敷はせうとこゝは無事の由目出度存じい、拙者事未だすきと無に坐い、像も及延引い、此度翁も手を觸れられしい五老井の古木ゑて刻みまゐらせい、かねて大なる像刻み度望ゑは坐いへども病氣ゑて叶ひ難く、おほまた得貴意ずい、不備、十月三日

霜の後傑ゑ深ゆべき菊も無し

と言へるが如き、いづれも頃日の許六としてはふさはしからぬやうまおもはるれど、凡そ人、身まに病あれば心平おる能はず、強いて自ら諧し、強いて自らあざむくの已むを得ざるまに至る、傳へ曰ふ、許六癪の病あり自ら恥ぢて人に面せず遂いまに是れが爲めまに仆ると、大言壯語を挺まし同門の嫌惡を招くを省みざりし許六は強いて自ら慰め、一時の快まおもひを遣りし結果まあらざる無きか、思ひて爰に至れは自重不遜の文字もまたあはれむへく歎ずべきものあるにあらずや、然り而して靜に過現未を眞想するの際、恍惚としてわれのわれたるを認め、師翁を追慕し、何の得たる所も無しとて士人の依頼を辞せる、おのづから春風の如きものありしもあやしむまに足らず

句は流石まに自ら芭蕉の血脉はわれおらで承けたるものおしと、放言せる丈け、幽玄の俳調を傳へて、誦すべきもの少からず

蚊遣火に團扇あてけり秋の風

一竿は死裝束や土用干

嫁入りの門も過きけり鉢たゝき

かけろふや壁のぬれたる夜の雨

田樂や仰向く口に舞ふひばり

大名の寢間にもねたる夜寒かな

蚊やり火の煙にそれる螢かな

卯の花に蓋毛の駒の夜明かな

去來曰く、此句、予此趣向あり、句は在明の花にのり込むといふて、月毛蓋毛馬は言葉つまり、のゝ字を入れゝは口にたまり、さめ馬は雅ならず、紅梅さひ月毛河原毛、思ひ廻らして首尾せず、其後許六が句を見て不才を歎ず、實に畠山右衛門佐といへば大名なり、山畠佐右衛門といへば一字を加へず庄屋なり、云々と

されど許六の天才は俳句よりもむしろ散文まあらはれたるは、一代の著を見るものひとしく認むる所ならん、その百花譜の如き有數の奇文と言ふまは憚らず

畧傳は眉目容すぐれ髪ながく、常は西施が鏡を愛して粧盛まは眠り、後世なんどのとは、露ばかりも心まかけぬ身の、一念のうらみまよりて、ぞそと剃りてはちて尼まおりたるこそ、肝

つぶる〳〵わざなれ

杜若はのぶとき花なり、うつくしき女の盗みして耻を知らぬよ似たり

あやめは小づくりなる女の、目を病める心地ぞする

鶏頭は和の無き花なり、よからぬ女の一筋に貞女をたてるが如し、

萩はやさしき花なり、さして手にとり愛すべき姿は無けれど、萩といへる名目よて人の心を動かし侍る、たとへは地下の女のよく歌よむと聞きつたへたる、おつかしさよは似たり

冬牡丹のしやれ過ぎたる、たとへば大津伏見など、分内狭き所の遊女町、工商の家、軒をならべうちまじりたれば、白地のむすめども傾國の風俗を見習ひ、養父入り生身玉の里かへりに、えやれをつくし、ひたすら遊女の立ち振舞に似たれば、兩親いかはかりかも悲しと側しつらん、時と所を知らざるは大なるいき過きならむ、以つて一班を窺ふに足る

許六姓は森川、名は百仲、字は羽官、一に菊阿佛と号し、居を五老井と呼ぶ、性敏慧多能、嘗は狩野安信に學び頗る妙手の譽あり、所謂六藝に達するを以つて許六の名は師より與へられしといふ、正徳五年、彦根に沒す辞世にいはく

一時打破屎蕉蛮　芬々臭氣供梵天

下手はかり死ぬる事ぞもおもひしに

上手も死ねはくそ上手なり

○東花坊支考

風俗文選の作者列傳にいはく

支考字盤子、號東花西花、亦号獅子庵、濃州之産也、入蕉門業風雅、一方門人也、先師滅后遊東西南北、説風雅而助諸生、故往々慕支考風者多矣、中寓居干勢州山田、後歸故國作俳諧之論、

畧傳は是れよて盡きたりといふべきも、なほ少しく委しくえるせば、支考姓は波邊、はじめ禪に參じて緇衣の身たりし頃は鎮風主といひ、中ごろ醫にかくれては見龍と呼ぶ、華表人、蓮二坊、桃華仙は特に設けし名よして、野に在る時は野盤子、四方を遊歴しては東西華坊と稱し、渡白狂は東花坊の一弟子なりと自ら畧しぬ

禪閣に在りし頃、年未だ弱冠なりしが、天賦の奇才は夙に先達に知られ酷しく眷顧を受け、ある時の如き、碧嵐の八雛間に老僧を愕然たらしめしなどのともわりしが、はし無く同僧の猜忌をひき、遂に禪機を挫かるゝに至り、快々として樂まず、去つて伊勢の山田よさすらひ、神風館涼菟の門よ遊びて、はじめて指を俳諧よ染む、其頃の吟なるべし

涼しさや椽より足をぶらさげる

句巧なるにあらねど、後年支考の支考たりしは是れよりても、略々知るを得べし、涼菟、其才を惜しみ歎めて蕉翁よ見ゐしひ、支考自ら記して曰く

一年湖南の幻住庵に白頭の翁を見て、才能は文字をはなれ、風雅は心を遊ばしむるものなりと聞いて、此翁とあそぶ時は、酒に醉へる人の何故ならで、おもしろき心地ぞ侍りける

（下略）　陳情表

實に支考が蕉翁と語る時は、酒に醉ひし人が何故とも知らざるが如くありけむ、此妙機に惹せられて、直ちに正風の本領を窺ひ、幽玄の趣を會し、吹毛劍也春三月、斷腸牡丹花下風、の偈に耆宿碩德を驚殺せしめし鎭藏主は、一躍して俳諧師東花坊支考となりぬ

是に於いて東西に吟行し、元祿五年よは葛の松原をあらはし、漸く晩年の地をおす第一歩よ辿る、然れども支考が名、未だ高からず、越ゑて七年九月のはじめにや、惟然と共に片野の野翠亭より芭蕉の行脚よ伴はれて大和路の露よさすらひ遂に難波に至る、十月十二日芭蕉病みて花屋仁左衛門が裏坐敷に寂を示せしまで、終始側よ待して看護怠らず、　惟然手記の十一日の條に（前略）　支考は師の發句を減後に一集せむ心願あれど、此頃の病苦におやみ給ふに見合せ居たりしに、今日機嫌よきに乘じて、申し出で侍らむと、去來にやしたりければ、去來、豫ねてより師の心中を知りたりし故大いに怒り、小賢しきことを申さるゝものかな、師は平生名聞らしきことを好み給はず、今日やう〳〵快き躰を見受け侍りて、諸人嬉しと思ふ中に心氣に逆ふことを聞かせ申して、心を勞せしめ申すと奇怪なり、此後病床近く寄り給ふな、早く其坐を立ち給へと、聲あら〳〵かに次の間に追ひ立てけり、支考も料らずもの言ひ出して、諸子の聞く前面目を失ひ、行く〳〵惟然にうち向ひ、われよ何あり、そこ審き給へといひて

去かられて次の間に立つ寒かな

流石支考なりければ、師もはの聞き給ひておかしがり給ひけり云々、これよ因りて見るも支考が天禀の機鋒、敢ゑて撓まざる勉勵より得たる智識は、芭蕉を初め、同門の人々にも知られしも、未だ其角丈草去來が輩とは同列に伍するに至らざりしは察するに足らむ、さるを芭蕉の滅後よは間もなく故國にかへりて、俳諧十論續五論、爲辨抄、古今抄などくさ〳〵の書を撰び一躍して十哲のうち、否十哲中の剛のもの〻名を擅よするよ至る

蕉門第一といふべき五老井が傲慢自尊は、是れを言ふ甚だ卒直よして、師翁の腹中よ下駄ばきよて這入りしものは我ならで誰かあらむ、正門直指の俳諧を得たるもの我ならで他よある

を聞かずと放語を憚らず、去かれかぞも支考が神出鬼沒、前よあるかとすれば忽然とし后よあり、奇兵を弄して敵をおびやかし、一段の巧妙をもてあそんで、傲慢自尊を逞うせしの才あるに及はず、されば許六が其直指傳のうちにも

東花坊は賢きものなり、先師身まかりし後、自ら上手といはせ、師説ようとき事もあるよ、や、虛實新古の取りちがへもあるべし、俳諧を弘ひるよは利あり俳諧の道を殘す爲めよは大いよ害あり

なぞ言へる、支考が蓮二坊選、波白狂註といへる署名よて出せる、本朝文鑑の一篇よ手をかへ品を替へ、自讃の言を縱横よせるよ思ひ合さるべく、はた支考が

江東の許六は、風雅よ大剛の男よして、管城に俳諧の旗をひるかへし、詞林よ文章の斧をよこたへ、天下の俳士を說破するよ、俳諧壇上よその印をかけて、鐵心石肝の大將といふべし

といひて許六の死を吊せる、素より、誅なればよはあれど同氣相憐れむといへる其間の消息無からずとせんや、要するよ支考の一生は、敏捷と權畧とを以つて徹はるその自造終焉記の一節よ、とも〳〵此東花坊は芭蕉の門よ入つて、俳諧は其理屈無きとを知り、俳諧よ此道理あるとを知らざりしよ、葛の葉の句評よ阿翁の論を聞き得て、俳諧はかく理屈無し、物よ不尽の情をとぞ知れる、さるは元祿のはじめなれば、年また二十四五なるべし、東は松島象潟より蝦夷が千島よ浪のよるべを尋ね、西は松浦箱崎より唐船の便あらばと思ふ、まして三越路は鴈の行きかへりて、南は住吉の春を迎め、和歌の浦浪よ風骨をあらふよ、身は花鳥の風情ある中よあそび、心は雲水の行衛無き方を樂しみて、終よ吉野山の一句よ口を閉ちたるか、